

## 翻訳：北米インディアンの生活 (11)

### －23部族の伝承と習慣－

エルシー・クルーズ・パーソンズ編著 神徳昭甫訳

#### VIII 北方アサバスカン部族

##### VIII-1 ウインディゴ、チプウィアン族<sup>1)</sup>の物語

フォート・ハーンにあるハドソン湾株式会社の支所の背後で、彼らは女をめぐる闘いであった。結婚の神聖さに関するカトリックの牧師さんの言葉は忘れてしまったし、監督派教会の宣教師の教えなんぞ、とっくにどこかに置き忘れてしまった。ちょっと瞬きするだけで、そんなおおげさな新式の観念などは、深く根づいている昔からの習性によって消し飛んでしまったのだ。インディアンたちが、「ボタン、ボタン、ボタンを持っているのは誰？」というゲームを平和に演じているとき、見物人の半数はゲームの結果にシャツや毛布を賭け合っていた。しかし本当の見世物が始まったのは、酔っぱらったラムジィ・マックレイが千鳥足で群衆の中に侵入して、ブランシュ・ルクヴールに抱きついたときだった。彼女の亭主が地べたに押し倒したが、酔っぱらいは起き上がるや、指をルクヴールの顔に押しつけ、その亭主に対して昔ながらの女をめぐる決闘を挑んだのである。

それ以後は「推理ゲーム」は中止して本物の娯楽が始まった。ラムジィは地面に長々と伸びてしまったが、しかしこれが口火になって別の乱暴者がカザミアに突っかかり...という具合に延々と続けられた。事態の暴動性はなくなって、うまいこと「懸賞つきボクシング」に収まってしまった。一度に一回の「試合」だけになったのは、自分がその脇で別の試合を演じてしまい見せ物の一部を見損ないたくなかったからだ。格闘家たちは取っ組み合うより先にアサバスカン公認の流儀で互いに相手の髪や耳を掴んで引っ張り合った。アンガスが小柄なゴードンに手袋を投げつけ、豊富なペギーをいわば「不戦勝」でまさに引っ張っていく寸前にまでになっ

---

1) Chipewyan. 「ユーコン・マッケンジー・インディアンの一部族。カナダの内部で、グレート・スレーヴ湖とアサバスカ川、ハドソン湾にはさまれた地域に住む。言語学的にはアサバスカ族のなかの北方アサバスカ語派に属する。チプウィアンとは“とがった皮”という意味のクリー語で、かれらがとがったアノラックやシャツを着ていたことによる。カリブーの狩猟と採集を生業とする。なお、ここのバンドのひとつがアサバスカと呼ばれていたのを、パウエル (J. W. Powell) が1891年に語族名として採用した。白人との接触以前の人口は3500であったが、天然痘のために18世紀末には1000に減り、現在は約4700」(祖父江<sup>1</sup>472)。

たときは、いや面白いの、何のって！しかし隠れ家に蹲っていると思われた、<sup>キャンプ</sup>露营地一番の器用でひょうきん者がテントから飛び出て、頭を短く刈り込み、脂で両耳、体を滑りやすくして、それで条件が不利になった敵の長い髪を掴んで地べたに引き摺り倒したときはもっと大きな笑い声が起こった。もっとやれと嗾ける声や勝者を褒めそやす叫びがどつとばかりにあちこちで上がった。親しい友が勝って銃を振りかざすものとか、網やテントを賭けるものもいた。争いの原因である女たちは、闘いが進行しているあいだは身じろぎもせずに見守っていたが、ラムジィが倒されたとき、ブランシュはホッと安堵の溜息を漏らしたし、ペギーは自分を「手に入れた」独りよがりの「<sup>キャプター</sup>獲得者」を見て皮肉な笑いを抑えきれなかった。他のみんなは抱えられていくときシクシク泣いていたが、マリヤに関しては別で、「所有者」が変わったことで満足のあまりに泣いているのを誰もが知っていた。先立っても旅から戻って来たばかりの今の亭主にほとんど半殺しにされるほどの目に遇われていたほどで、その暴力にはほとんど愛想が尽きていたからである。

しかしクライマックスは、あの巨漢のダグラスが、ごつい手をピエール・ヴィレニューヴの顔に押しあてたときだった。確かにルイズはこの部落の内外の女の中では一番の美貌の持ち主だったのだが、今までこの荒くれ男どもは彼女の亭主に挑戦するのを控えていたのである。誰もが彼女の品性や親切を認めて敬意を持っていたし、また誰もがピエールを好いてもいた。この男は実に邪気のない、気のよい、善良な人物で、<sup>バック・ストラップ</sup>背囊の紐とかトバゴンを造らしてはとても器用で、食料持たずの二日がかりの旅では、みんなが疲れ切って倒れそうになっても、「わが美しき国」という昔ながらの楽しい歌を歌ったり、この部族の俗謡などを口ずさんだりして、仲間としては最適の人物であった。しかし酔っぱらって女に飢えた、盛りのついた犬のようなダグラスに対抗できるようなものがあつたらうか？ 身長において4インチ<sup>2)</sup>の差があり、体重は大石二つ分の違いがあつたから、ダグラスが略奪を試みるには十分の根拠があつたのだ。しかしピエールは、筋肉質で敏捷な体を持ち、彼の握力の強さは広く知れ渡っていたから、決して見下すことの出来る相手ではなかつた。ダグラスが、<sup>タタール</sup>容易ならざる敵だと認めるのに時間はかからなかつた。まさに勝利寸前の状態が二度ほど訪れたが、そのたびにピエールは彼の手を振りほどいて無傷だった。遂に、避け得ぬ事態が発生すると思われた瞬間、ルイズの口から苦痛の悲鳴が上がった。ダグラスが夫を抱え上げ地面に投げ下ろそうとしていた。しかしどうしてそうなつたのかすぐには誰も分からなかつたのだが、予期せぬ出来事が起こって、ダグラスは喘ぎ喘ぎ地べたに伸びてしまった。彼は踵を挫いてピエールの友人の歓喜と嘲笑の最中、ビッコを引き引き逃げ帰ったがこの間、この男を応援した者にしても勝利者を讃えるくらいのスポーツマンシップは持っていたのだ。

---

2) 約10センチ

そのときだった。笑いこけ、大声を上げ、身振り手振りとともに打ち興じている群衆を掻き分けて一人の巨人が姿を見せた。この喧噪と興奮の最中で、ついぞ見たこともない混血の男の登場に気づいたものはいなかった。「ハドソン湾紳士・冒険家貿易会社」<sup>3)</sup>からの紹介状をもって昨日着いたばかりだった。名前がジョージ・マクドナルドというだけでそれ以外は何も分かっていなかった。何という巨体だろうか！そばにいれば、ダグラスさえも子供に見えるほどだった。ピエールなんぞはほんの赤ん坊のようなものだ。マクドナルドは寡黙な奴だった。ルイーザの方へ大股で歩いて行き、軽く腕に触れて言った。「オレ、おまえが欲しい」。彼女がキャッと叫んで後ろに飛び退くと同時に、ピエールがその巨軀めがけてめくら滅法に飛びかかったが、がっしりと抱えあげられて軽く地面に下ろされた。もう一度、この勝者に向かって飛びかかったが、万力のような腕っ節に挟まれ前と同様、地べたに寝かされ、怒り狂うだけでどうすることもできなかった。激怒したピエールはナイフの鞘をぬいたが、ここでカザミアとゴードンに両腕を押さえられ、群衆も叫んだ。「冷静に、冷静に！ 新入りは公平に戦ったぞ」。

マクドナルドは静かに、横柄な態度で立っていた。ルイーザに向かって「オレが勝ったぞ、来い！」と命令した。振り返りもせず、自分のテントの方へ歩いて行き、女は泣き泣き<sup>あと</sup>に従った。それがその日の最後の勝負となった。

## II

マクドナルドはフォート・ハーンに留まり、交易所の出口に自分の暮らす小屋を建てた。数日間、留守をしたかと思うと、スレイヴィ族<sup>4)</sup>を何人か従者に連れて戻った。それから、ハドソン湾会社に対抗して商売を始めた。この男は他の誰も真似が出来ないようなインディアンを扱うコツを持っていた。毛皮を高く買うよりむしろ安く買ったし、プレゼントや機嫌を取ったりすることは軽蔑していた。それでも、猟師が銀ギツネかなにか、他の高価な毛皮を取ったとき、獲物は会社の倉庫に保存されるより、このむつつりした巨人の掘立て小屋に行くことになったのである。彼には向かうところ敵なしだった。代理人が次から次へと派遣されて来たが無駄であった。とうとう支店長が自ら、この交易所に向いてマクドナルドを買収し、彼をこの所長にしてしまった。

フォート・ハーンは活況を呈してきた。これまでマクドナルドのような仲買人は見たこともなかった。彼は父親の話すアイスランドの方言に加えて、ドッグリップ<sup>5)</sup>、チプウィアン、ク

---

3) the Company of Gentleman and Adventurers' Trading into Hudson's Bay

4) Slaveys. スレイヴィはカナダ北部のインディアンでチプウィアン、ドッグリップに隣接するアサバスカ系先住民 (アシャー/モーズレイマMap1,2)。

5) Dogrib. カナダ北部のGreat Bear湖とGreat Slave湖の間に居住するアサバスカン系のインディアン、およびその言語。その居住区はチプウィアンやスレイヴィと境界を接する(アシャー/モーズレイマMap1,2)。

リー<sup>6)</sup>の言語、それからフランス語も話したので、周囲何百マイルの範囲で会話が通じない猟師はいなかった。朝から晩まで立ちっぱなしだったから、他のものも絶えず動いていた。フリーの間は同じ条件で競争して会社を負かしたほどだった。会社の威信を後ろ盾にした今は、どんな独立商人も頭角を現すことはできなかった。<sup>フェア</sup>正当な手段では誰も敵わなかったし、それにマクドナルドに対して敢えて腕力で対抗したり、あるいは策略を用いるような人間がいたであろうか？ 怠惰で退屈な時間を四方山話で潰さなければならない長い冬の夜に、この巨漢の仲買人について奇妙な噂話が伝わった。その前歴がほとんど何も、と言っていいほど知られていないので想像力だけが暴走して歯止めが利かなくなったのだ。アンガスによれば、この商人は実は狼に変身することができる、だから狼の姿で鹿狩りをするのを自分は知っている。カザミアは革帯で繋いだ六人がかりのインディアンによって引っ張られる積荷満載の平底船を、一人で引く少年時代のマクドナルドの姿を思い描いた。ジーンは熊を追って川を渡り、ナイフでし止め、その死骸をキャンプまでの30キロを運んだという話を叔母さんの一人から聞いた。弾丸も通さぬ不死身の肉体の持ち主だというものもいれば、多少キリスト教の知識のあるものは、この男は悪魔と契約を交わしたのだ、と話すものもいた。彼は新たに生まれた伝説の中の中心人物になっていたのである。

当のヒーロー自身は陰鬱で荘厳な古代北欧の神さながら舞台狭しと動き回っていた。決して誇らず、慌てず、仕損じることがなかった。二艘に分かれてカヌーを漕いだ部族のものが全員転覆して溺死して以来、決して試みられることのなかった急流を無傷で渡った。酒飲みの競争相手が打ち金を起こしている鉄砲の方に歩いて行き、平然と相手の手から銃を叩き落とした。マクドナルドは怖いもの知らずだった。

この商人と<sup>トレーダー</sup>ピエールの間に奇妙な関係が芽生えていた。むろん、この仲買人は人<sup>ファクター</sup>を将棋の駒のように扱ったし、よい助手になりそうな人物には会った途端、直ぐにそれと察知した。しかしピエールに対しては、最良の助手に対して通常払う以上の配慮を示した。おそらくそれは、ルイズの方から前の主人に対して親切を促すような働きかけがあったのかもしれないし、おそらく、被害を与えた相手に対して自然に生じる、何か感傷的な気持ちがあったのかも知れなかった。確かにそうであったにしても、ピエールはマクドナルドの直<sup>つれ</sup>属の助手であり、事前の調査や、たまに出かける気晴らしの散策などでは良い<sup>つれ</sup>伴侶となったのである。

ピエールにとってこのむっつりとして横柄な主人は、唯一無二の興味の対象であった。彼は

6) Cree. クリー族は、チプウィアンとは言語の異なるオジブワ（中央アルゴンキン語族）系に属する。チプウィアンに隣接する「カナダ北・中部」から「ハドソン湾までの広大な地域を占めていたインディアンで、森林クリークと平原クリークの2つに分けられ、前者は森林での狩猟と農耕、後者は野牛狩りをしてきた。人口は現在約1万」（祖父江<sup>2</sup>232-233）。

この男の習慣、動作、話しぶりをとくと観察した。熱心にその弱点を探したが、しかし懐疑心から始まったこの覗きは、しづしづとであるが途中で賞賛へと変わり、更に後には驚嘆へと変じて彼をがっかりさせたのである。妻を略奪した相手に対する憎悪から始まったが、今はこの並ぶものもない強者を憎むその気持ちに、より強い興味が入り混じていたのだ。それは単にこの巨漢の腕力と、怯むことない胆力のみではなく、人間を扱うそのやり方であった。彼が**カザミア**や**アングス**、**ラムジ**に対してどのように命令したか。叛乱を鎮めるにはただ一言で十分だった。初めは何度も何度もこの男に挑戦状を叩きつけようと思ったが、しかしいざその時になると、決意が萎えてしまうのだ。確かに、みんなに好かれてもいたし、一通り尊敬されてもいた、しかしそれは別の話だった。自分には他人に命令するような資質はなかった。もし勇気を振り起こしてそうしても、それは無理をしていることがすぐにバレて、面と向かって笑われるのがオチだった。その結果恥ずかしさと、屈辱のあまり、こそこそと逃げてしまうだろう。なぜ、人は生まれたときから違っているのだろうか？ なぜ自分は**マクドナルド**のように、生まれながらの指導者ではないのか？ なぜ他人に君臨される星の下に生まれたのか？ こうして彼は夜、何時間もよくよと思ひ悩んで、人生における希望も喜びもすっかり無くしてしまったのだ。

ところが、ある日思いがけなく、この絶望が晴れる事件が起こった。彼は仲買人と一緒に狩猟に出かけたが収穫もなく、二人は雨の一日が終わろうとするころに交易所の辺りに近付いた。深い森の中を歩いていた。二人ともずぶ濡れになっており、**ピエール**はほとんど疲労困憊の状態だった。突然、奇妙な空想が彼の心をよぎった。子供時代に冬の露営の火を囲んで何度も語られた気味悪い話が記憶の中に甦ってきてもう、どうにも鎮めることができなかったのだ。暗くなると、森には得体の知れない生き物がうようよといる。**ウインディゴ**という、ギラギラした眼と、骸骨のような恐ろしい姿で、人肉を啖う化け物が出回る時間だった。そいつらは樹蔭に潜んでいるのだが、深い沼地の中からでも旅人に襲いかかるのだ。連中に見つかったらもう、逃げる機会はない。骨をガタガタ鳴らしながら、奴らは鷹が飛ぶよりも速く追いかけてきて兎のように八つ裂きにされてまる呑みにされてしまうのだ。**ピエール**が今横切っているのは、以前畏れ師が一度入り込んだきり、姿が見つかっていない、まさにその森であった。ますます恐怖が募ってきた。深さを増す闇の中を警戒して透かし見ながら、それからチラチラと何度も背後を窺った。**マクドナルド**が近くにいるのが嬉しかった。他の誰よりもこの大男なら、自分を守ってくれるだろう。**ピエール**は安心したが、それでも危険な目に逢わずにすむなら、それに越したことはないので、いっそう足を速めた。

突然、大枝の折れる音がして、椰揄うように自分の名前が呼ばれるのが聞こえ、ひよろ長い姿がシュッと森の中を通り抜けたかと思うと、大口を開けたゾツとするような顔が10フィートも離れていないところから彼を見ていた。恐怖のあまり後ろを振り返って前方を指さしながら

「ウインディゴだ！ ウインディゴだ！」と叫び、マクドナルドの方へ逃げた。しかしこのマクドナルド、巨大な拳でこの怪物を殴りもせず、また熊と格闘したことがあると言われたのに、取っ組み合うこともしなかった。その顔は真っ青になり、大きな凶体はガタガタと震え始めた。彼の血の半分はインディアンだったからである。それから先、この男は飛び跳ねるように全速力で森を走り抜け、川岸までたどり着き、岩を噛む急流を伝わりながら、ようやく大きな倉庫が見えるところまで来た。そこで大きく息を弾ませながら一休みしている間も、額から冷や汗が噴き出してきた。ピエールもその後を追いかけて行きやと主人に追いついた。二人とも頭の前から足先までブルブルと震えが止まらなかった。マクドナルドは「ウインディゴだ！ ウインディゴだ！」と呟き続けていた。こうして彼らは交易所まで歩いて帰った。ピエールの方は、格闘の末、ルイズを失って以来、久しく忘れていた明るい気分を取り戻した。何せマクドナルドときたら、フォート・ハーンに帰り着くまで、その間ずっとウインディゴを怖がっていたのだから。

## III

カザミアは重病に罹っていた。食欲はなくなり、両足が麻痺しているようだった。クリー族の高名な医師が、近辺のチブウィアン族の村のものを診察しているという噂が入り、相当な謝礼を弾むという約束でフォート・ハーンに迎えよう、ということになってその結果、ピエールが遣わされたのである。クリー族の医師は承諾した。これは騒々しい老人だったが、同行中、この医師の実力を押し測ろうとしてみしたが、この点に関しては妙に押し黙ってしまった。「今にわかるさ」と言う答えが返って来たので、黙って待っているしか他に方法がなかった。

交易所に着くと、この呪<sup>メディスン・マン</sup>医は狭い仮設小屋を立て、自分の両手、両足をしっかりと縛って、体を押し込んだ。呪<sup>インキャンテーション</sup>文を唱えると小屋全体がガタガタと揺れ始めた。内部には奇妙な霊がうようよしているようだったが、それはこの世ならぬ物音が聞えてきたからだった。やがてすべては死んだように静かになった。戸を開けると、祓<sup>コンジュアラ</sup>魔師は手足を解かれてまるで忘<sup>トランス</sup>我の状態から醒めたような様子だった。彼は諸霊が自分の元を訪れていたのだと言い、カザミアは回復すると宣言した。次に患者本人が小屋の中に寝かされ、医者が素っ裸になって中に入った。膝をついて歌を唱い、カザミアの心臓に息を吐きかけ、胸の部分を吸いあげると、守護霊と語りあうように病人に話しかけた。それから3フィートもある棒を呑み込み、吐きだそうとしたあとで病はすっかり癒えた、と公言した。実際にカザミアは小屋から運びだされると、うるさいほど食べ物を欲しがった。そして一週間後、彼は元通り歩き回った。それで彼の家族はこの偉大な呪術師<sup>マジシャン</sup>に雨あられと謝礼を弾み、他のインディアンもこぞって、あらゆる手段を使っては彼の注意を引き、なんとか機嫌を取ろうとした。

ピエールは他のものほど露骨にこの老賢者<sup>オールド・セイジ</sup>に取り入ろうとしはしなかったが、時々、みんな

なが寝静まった頃、酒と煙草を持ってこっそりとこの呪術師<sup>コンジュアラ</sup>のテントを訪ねてはいろいろとマジック・アート<sup>マジック・アート</sup>に関する質問を浴びせたのであった。しばらくしてこの客人は警戒を解いて口数は増えてきた。地面に仇敵の絵を描き、槍先をその心臓に突き刺して術をかけたことまで白状した。しかしピエールが自分にもまた呪いをかけたい強敵が存在することをほのめかすと、この老ギツネはそれを遮って、黒魔術<sup>スベル</sup>は危険な仕事だよ、と言った。人によっては生まれながら超能力を持っていて術者のかけた呪いを倍にして投げ返すことのできるものもいる。それに、もう自分は歳をとり過ぎた、余生を平安に過ごしたい、と言うのだった。

ピエールはクリー族の呪術師<sup>ピウイッチ</sup>を使って主人に呪いをかけるのが無理だとわかると、戦略を変更した。ウインディゴの正体はいったい何なんだろう？ 彼は母親からいろんなことを聞いていたが、実際にこの怪物は存在するのだろうか？ これはメディソン・マンに依頼するほどデリケートな問題でなかった。実際にウインディゴには会ったことはなかったが、別の呪術師<sup>コンジュアラ</sup>から多くのことを聞きだしていた。確かにウインディゴは危険な霊であり、おそろしく強大でもある。どのくらい強いだろうか？ あの仲買人に勝るとも劣ることはあるまい。では枯れ枝のようにあの男を真っ二つにしてくれるだろうか？ 人間に襲いかかっては内臓を引きちぎり、頭部をボールのように蹴って遊ぶというではないか。

連中を味方につける方法はあるが、しかしこれは非常に難しい。奴らが出没する森の中で三、四日断食して、進んで自分の身体を差し出せば、喜んで養子にしてくれるかも知れない。確かに丸ごと呑み込まれるかも知れないが、しかし吐きだされたらもう、それから先は、ウインディゴの一人になって、猛々しい人喰い人種に生まれ変わるのである。他のインディアンもこんな連中には決して近寄らず絶えず遠巻きに見張っていなければならない、自由にさせれば目に入るものは誰でも殺してしまうから、宥めすかして思いとどまらせる必要がある。ピエールはまた、子供の頃に集落のものが怖がっていた、ある痩せた男を思い出した。臆病な人間はこの男にちょっと見られただけで痙攣をおこしてしまったものだ。

ピエールは人目につかないように家に帰り、長い間考え込んでいた。森の悪霊を利用すべきだろうか？ 自分の祈りは効き目があるだろうか？ 身体を犠牲に申し出る前に食われてしまったらどうしよう？ しかし、なんで自分は今生きている？ ルイズを失い、なおかつその略奪者がフォート・ハーンの支配者なのだ。ウインディゴが自分を加勢してくれなければ、この人生には何の意味もないではないか？

あくる朝、忘れもしないあの晩、マクドナルドと一緒に通ったあの森の中に入っていった。一日中、食べ物は一切口にせず、翌日も祈祷を続け、ウインディゴに祈った。漸くのこと、勇気を奮い起して自分の胸を大きなナイフでさっと切りつけ、その身体ごと霊に差し出したのである。それから気を失って彼は倒れた。眼が醒めたときは、胸の痛みにもかかわらず、心は喜びに溢れていた。ウインディゴの一人が確かに現れて彼に恵みを与えてくれた。それは、少年

が蛾を捕まえるように彼を捕まえた。しかし血が胸から流れているのを見ると、憐れみをかけ、呑み込んで直ぐその後吐き出した。今度の春にはウインディゴになって復讐を果たしてやるのだ。ただじっと、時の来るのを待っておればよい。

家路に就きながら、自分が新しい力を獲得したことが嬉しくてたまらなかった。一つ、試しにみんなを驚かしてやろうか？ 彼もまた、今や自分の力を他人に見せびらかしたくなったのだ。最初に出会った人間は恐怖のあまり卒倒するだろう。向こうにテントの前で網を繕っているアングスの姿が見えた。奴もその次に出会う人間も、同じく震えあがるだろう。急いで目の前まで駆け寄りひどい顰め面をして大声を上げた。「オレはウインディゴだ！おまえを喰いに来たぞ！」

しかしアングスは大笑いをした。「おまえがウインディゴだと？ 蠅一匹だって殺せやしないくせに！気でも狂ったのか？ 酔っているんだな？ 家に帰って寝ろ！」 ひっぱたかれた野良犬さながら、ピエールはすごすごと家に帰ると、あまりの落胆に寝床に身を投げ出すと屈辱感に浸った。ウインディゴは加護を約束してくれたのに、でもまだオレはウインディゴにはなっていない。自分にはそんな力は備わっていない。ウインディゴでさえ、マクドナルドのような人間だけを助けるのだろうか。こんなふうに自分の無能を悲しみ、疲れきって睡魔に襲われたときだった。そのとき、ウインディゴが大きく眼の前に浮かんできてこう囁いたのだ。「春になってからだ、愚か者めが！オレは春だと言っただろうが。」

#### IV

春になると、この仲買人にフォート・バティーズ<sup>7)</sup>まで大型の船隊を迎えに行くようにという連絡がフォート・ハーンに届いた。そこはまだ行ったことのない交易所であったから、彼はピエールを呼び寄せ、案内人にするから商用の準備をするように命じた。二人は十分な食料を用意した。長旅であるし、向こうに着いてからも船の到着が遅れることが予想された。ハドソン湾会社の輸送は予定通りに運行された験がないからである。ある晴れた朝、二人はカヌーに乗って、激しい流れを遡って苦心惨憺川上を目指した。ときには陸に降りて山ウズラを撃ったりしたし、マクドナルドが大鹿<sup>ムース</sup>を殺した日もあった。そうでもしなければ、この単調な旅の退屈さを紛らわすものは何もなかった。朝から晩まで彼らは人っ子一人、出会わなかった。マクドナルドがいつも通りに黙り込んでしまうと、ただ水を撥ねる櫂の音と、ピエールの歌う「レッド・リヴァー」という奇妙で物悲しい調べが聞こえるだけで何時間かが過ぎた。たまさかに何本かのテントの支柱のみで廃墟と化した場所が、かつては人間が住んでいたことを示していた。毎晩、二人は水際に野営して、トランプを一回か二回やったあとは翌朝四時、五時まで手足を伸ばしてぐっすりと寝た。夜になると、ピエールは奇妙な物音を耳にしたが、それは近づ

7) Fort Batise. アサバスカ川上流の交易所で、ハドソン湾会社の支所がある。詳細は不明。



いてくるに従って、「春だ、春だ！」という言葉に変わった。

フォート・バティーズに到着したが、交易所はほとんど藻抜けの殻だった。会社の社員は狩猟に出掛け、代理に当たる十人以上の現地人はみな、森の中にバラバラに暮らしている。ただ一人半馬鹿ハーフ・ウィットヘッド・ブリードの子が残って交易所を守り、無人の島を指差したのだが、そこは大昔から大型船が北の交易所に行く積荷を下ろす場所であることをピエールは既に知っていた。代理人とピエールは權を操って島に渡り、会社の従業員のために取って置かれた細長いガタガタの掘立て小屋に寝具を投げ下ろした。まだすこし寝るには早かったのでマクドナルドが散歩しようと言い出し、彼らは深い森の中をブラつくことにした。

ピエールはまるでこの仲買人のダンマリが伝染したかのようにその晩はいつになく無口だった。ところが、急に彼の舌が突然解放されたのだ。マクドナルドに向かって、これほどいい船着き場があるのに、あなたはなぜ交易所は、この島に移されなかったのか、その理由を知っているか？インディアンは決してここに住まないし、一人でここに来たことはない、なぜならここには魔物が出るからだと言っている。ここはサイモンの島と呼ばれている。話せば長い物語になるし、馬鹿げた話だが、しかし野営地の火を取り囲んでインディアンたちはさも本当のことであるように話している。もちろん、サイモンは実在の人物であって、自分が少年時代からよく知っている男だった——役立たずだったが、と言ってもそれほど酷い方ではなかった、ただ、いつもツキに見放されていた。まずどの女も彼とは結婚を承諾しなかったし、やっと結婚した女も子供を出産したときに死んでしまった。船を曳くのがこの男の仕事だったが、初めて旅したときに、風で落ちた果物に躓いて足を折ってしまった。気の毒に、サイモンはいつもこんな風だった。船曳を諦めて毛皮猟師になった。何年間もこの地方をうろつき回って、惨めで細々と辛うじて生計を立てていた。が、とうとう、彼にもツキが巡ってきて銀ギツネが罠にかかったのだ。もう、これで豊かな暮らしをしなければ、と考えた。でも最寄りの交易所に行く途中、別の罠猟師に出会い枕を並べて寝た。ところが朝になって見ると、この見ず知らずの男が銀ギツネを持っていなくなっていた。ありとあらゆる場所を探しまわったが結局何の手がかりもなかった。それからだった、この男が悲しみの余りに、ウインディゴになってしまったのは。男であれ、女であれ、偶然出会った人間を殺し、喰った。インディアンは搜索隊を作って野獣になってしまったこの男を探した。しかし彼はこの連中を笑って歯牙にもかけなかった、自分はウインディゴなのだ。決して捕まりはしない。それからしばらくたって、この男を搜索した連中がテントの中で殺されているのが見つかったので、もう追跡はやめて、餌を蒔いておびき寄せようということになった。宿営地の近くで姿を見かけると直ちに集落の外に獣肉が山のようになり積み上げられ、綺麗な着物がそばに並べられた。それから先、この村には構わなくなったが、ところがやがてまた、妄想に囚われて、別の集落に忍び込んで飢えを満たしてしまった。この話はずっと以前のことだが、サイモンが死んで葬られたのはまさにこの島なのだ。しかしこの

土地のものは未だにサイモンの幽霊がウインディゴになってときどき歩き回ることを信じている——ハドソン湾会社はまったくナンセンスだと笑い飛ばして、インディアンの気持を逆撫でするかのように、島に小屋を立ててしまったのだ——もちろん、会社の言っていることの方が正しいわけだけど…。

マクドナルドは聞きながら次第に真剣になってきたが、この間ピエールの視線はその表情を読み取ろうとしてマクドナルドの顔の上に釘づけになっていた。最初にウインディゴという言葉聞いた瞬間、彼の背骨に微かな戦慄が走ったのでは？ 幽霊が彷徨っているという行ではハッと息を呑みはしなかったか？ それに話が終わるとなぜ急に踵を返したりするのか？ ピエールが帰り道、口笛を吹いていると、仲買人は静かにしろ、と怒鳴った。いや、明らかに神経過敏になっている。オレの話が効いてきたぞ。

小屋に着くとマクドナルドは寝具を拾い上げ、呟いた。「たぶん、交易所に戻った方がいいだろう、ここは蚊が多いから寝れないだろうな」。彼はこの言い訳をピエールが信じることも期待していなかったが、このおとなしい部下が公然と自分を嘲るなんてことも思ってもみなかった。しかしピエールは彼を上から下まで見回してドライに言い放った。「サイモンの幽霊が怖いんですな？」「オレには怖いものなんかない！」マクドナルドは喚いて毛布を床に叩きつけて、同伴者を睨みつけた。彼は大股で部屋の周囲を歩き始めた。間違いなく不安なのであった。トランプも、もうやろうとは言わなかった。疲れ過ぎた、とこう言った。このマクドナルド、以前は疲れたことなどなかったはずだが！そこで、二人は四つの角が尖った毛布<sup>8)</sup>を被って床の上で手足を伸ばした。でもどちらも寝付けなかった。

しばらくのち、マクドナルドはむっくりと起き上がるや、つま先立って戸口の方へ向かった。たぶん、彼はこっそりと堤防まで行って川を渡り、サイモンの幽霊から逃れるつもりだったのだろう。しかしピエールは完全に目が覚めていて極北の薄明かりの中でまじまじと彼を見据えていた。「なに、ちょっと背伸びをしたかったんだ」と大男は弁解をしたが、ピエールはそれは嘘だ、とも言うてくれなかった。彼は今やドアを背にして座り込み、この仲買人をさも軽蔑したような眼差しでジッと見据えていた。大男は途方に暮れた。ピエールは何を画策しているんだ？ 奴さん、どうして幽霊の出るような、こんな場所で落ち着き払っているんだろうか？

マクドナルドの胸中に不意に狂気のような憎しみが持ち上がった。このチビの薄のろに拳闘を一発お見舞いしたあげく、奴は急流に落ちて溺れたとでも言おうか。そうすればフォート・ハーンに戻っても自分の弱点は誰にも知られずに済む。しかしピエールは依然銃を両膝で抱えたまま、こちらを見据えている。マクドナルドにすれば、銃はほとんど怖くなかった。少なくとも奴を不意打ちして銃をもぎ取るくらいのチャンスはあるだろうし、それに自分はこれまで

---

8) four-point blankets. この部族は先の尖った衣類を着ることが知られている（本注1参照）。

一か八かの賭けにおいて躊躇したことなどなかったじゃないか。ところが、ピエールの視線には、彼を疎ま<sup>すく</sup>せ抑え込んでしまう何かがあった。そこで彼はピエールとドアの真正面に対峙し座っているだけで、両者とも一言も発しなかった。

何分かが過ぎて、妙な音が聞こえてきた。床が軋み出し、ドアがガタガタと音立てた。向こう岸では、今まで聞こえなかったのに犬が吠えている。何か屋根に——蝙蝠か？——絶えず突き当たったり、それに戸口では一定の間隔をおいてコツコツと不可解な音がする。仲買人はモゾモゾとして音の聞こえる方を透かし見た、しかし——今やピエールは6フィート離れた位置に不動のまま容赦なく腰を下ろしている。そのとき、前とは違う音がした。ゆっくりと、重い足取りでそれは水際からこちらの方へやってくる。

その音は、小屋の後ろ側から、ぐるっと一周して正面に近づき、戸口に達した。マクドナルドは跳び上がって歩き出したものの、バツリと床に倒れ気絶して一瞬、恐怖から解放された。しかしその音はいったい何だったのだろうか？ 足音は更に近寄ってきた。その音の持ち主は小屋の周囲をもう一廻りしている。しかし中に入ってくる意志はなさそうだった。というのは、この正体不明の怪物はドアのところでは立ち止まらず、更に一廻りし始めたからだ。しかし入ってくる気はなくとも、中の住人に危害を加えずに離れる意志もまた、なさそうだった。それは更にもう一回廻り始めたからだ。「サイモンだ！ 四度廻っている。このあと、立ち止まってアంతのところへやってくる気だ！」 マクドナルドはバネ仕掛けみたいにピョンと跳び上がり——追い詰められた獣だった——今や留まることも、動くこともままならず、通り過ぎてはまた引き返してくる、一段と大きく明瞭さも増してきた、この奇妙な足音に聞き耳を立てていた。今は戸口に佇んでいるのか、静まり返っている。この正体不明の怪物がドアをこじ開けた瞬間、そこには見るのも厭わしい、あのサイモンの姿をした幽鬼が飛び込んでくるのだろうか？ ドアは閉まったままだ。しかしピエールは恐ろしい笑い声を上げて立ち上がり、銃を下に落とした。彼は主人の方に進んで、親指を彼の顔に押し当てた。「サイモンはオレたちが闘っているのを見に来たんだ。オレはルイズを取り返すために貴様をやっつけてやる！ 奴はおまえが投げ殺されて喰われているところを見物したいんだ」。恐れる様子もなく彼は狂気のように巨漢の喉元に飛びかかった。仲買人はそれを眺めていたが、彼には相手の言葉も聞こえず、依然としてじっとドアの方に目を凝らしているだけだった。フォート・ハーンでピエールを子供のようにあしらったあの、強靱な二の腕はどこに消えたのか？ ぐったりとして力なく、それらは最初の衝撃で抵抗力をなくし、ピクピク引き攣っている図体からダラリとぶら下がっていた。ピエールは殴り蹴り絞めつけた。ナイフも銃も使わず、素手で巨漢の仲買人を殺したのだった。このとき、彼は他ならぬ、あのウインディゴになったのである！

彼は歓喜して立ち上がった。ウインディゴの言ったことは本当だった。仇敵は死んで転がっている。次はどうする？ 交易所に戻って一部始終を話そうか？ 自分の言うことは信じても

らえるだろうか？ 酔っぱらって気が変になっているというかも知れない、蚊一匹殺せなかった男じゃないかと。マクドナルドの商売敵か、おそらくフリーの毛皮商人が闊討ちしたんだろうと言われるかも知れない。そしてこのオレはもう一度、善良で大人しいピエール・ヴィレニューヴに戻るのか？ すべては無駄だった。マクドナルドを殺したのに何にもならなかった。ルイズを取り返しても何にもならない。彼は死んだ巨人のように支配者になりたかったのに、到底それは叶わないだろう。

よろめくようにドアに向かい、戸をさっと押し開けた。何がいた？ 蒼ざめた顔が恐怖の余り、たじろいで、「ウインディゴだ！」という恐ろしい悲鳴が上がった。そのあと、男が一人、川に向かって逃げて行き、カヌーの櫂を漕いで向こう岸に渡った。忘れていたが、彼はあの薄のろに金を渡して、ほんの冗談だからということで、川向こうの交易所からこちらに来て、小屋の周りをウロウロしてくれるように頼んだのだった。この男は中を覗き込んですべてを見たはずだ。これでピエールは救われた、今や彼は勝者となった。目撃者の証言が広まって、この新しいウインディゴに警戒するよう、人々に呼びかけるだろう。ピエールは今やかつてのマクドナルド以上に偉大な存在となった。彼の名声は、ハドソン湾を発してロッキー山脈に及び、更にはレッド・リヴァーからフォート・マクファーソンにまで鳴り響いた。クリー族や合の子たち、チプウィアン族、スレイヴィ族、彼が今や自分の領土となったこの土地を歩き回るとき、彼らはいかに彼をもてはやしたか？ 彼はこの連中の毛皮を奪い、彼らの獲物を喰らい、彼らの顔を指で弾いてはその妻を攫った。彼は今や支配者となった。なぜなら、今や彼はウインディゴに他ならなかったからだ。

ロバート・H・ローウィ<sup>9)</sup>

#### 参考文献：

アシャー, R.E./モーズレイ, クリストファー 「Map」『世界民族言語地区』, 東洋書林, 2000年

祖父江孝男<sup>1</sup> 「チプウィアン」『文化人類学事典』石川栄吉他編, 弘文堂, 昭和62年, 231-232

—————<sup>2</sup> 「クリー」『文化人類学事典』石川栄吉他編, 弘文堂, 昭和62年, 472

---

9) Robert H. Rowie (1883~1957). 著名なアメリカの文化人類学者。原著の第一篇, 第二篇の著者。本訳に先行する拙訳「北米インディアンの生活 (1)」『富山大学人文学部紀要第26号』1997年3月, 279-338の訳注 (25) を参照されたい。

クライズ・フォア・サーモン  
VIII-2 鮭を欲しがって泣く、テナツ族<sup>10)</sup>の女

わたしの故郷、アラスカのアンヴィックに暮らしている誰かの人生を語ってくれというご依頼でした。前にお見せしたモカシンをわたしにくれた女性の物語をお聞かせしましょうか——男のことよりも女のことが話すことが多いので。しかし男についても、いずれお話しすることになりますよ、結局、女の話すればついでに男のことも話すことになりますのでね。

鮭を欲しがって泣くが生まれる前に、経験豊かな老婆、ハヴェステケドスタ、ゼア・リトル・グランドマザーあの家の小柄な祖母が呼ばれて助力を求められました。出産後の三日間、あの家の小柄な祖母は毛皮の寝台のそばから離れず、赤ん坊の母親もまた、この産婆の許可がなければ産褥を離れません。この辺りのことはわたしにはよくわかりません。男子はこんなときは家に留まらずに、カヅム、男の家に行くのですから。知っているのは、胞衣<sup>えな</sup><sup>11)</sup>は布に包まれて、木の又に置かれるということだけです——胞衣もまた体の一部ですから、破ったりしちゃいけません。あなた方が髭を剃って顔を傷つけたあと血を拭いたら、剃り落としたものと一緒に木の又に置くのと同じです。着古した衣服だって裂いたり、白人方のように火の中に焼べたりはせずに袋の中に入れておき、それからかなり時間が経ってからトウヒの枝に置くんです。森の中にほかしたものは何だってまだ村の中にあると看做されますから、祭りで練り歩くときは村から始まり、半マイルかそこの距離にある森も巡回区域に入りますし、その木の中にあるものだってそうなんです。

赤ん坊の臍の緒は動物の腱で手首か首の周りに巻いて、二、三年間そのままにして置きます。男の子の赤ん坊なら、体の上に斧の刃を何日間か置いておくのですが、何日間かは忘れまし、女の子の場合、何を置くかは存じません。こんなときに白人が入ってくれば取り除けます。もしその子が、二、三歳で死んでしまったら その斧か何かは死骸と一緒に埋めます。何故かはわかりません。年寄りにそのわけを聞いたことがあるのですが、仮に知っているも相手を信用していない場合、よくこんな風に答えます。「誰にわかるものかね」。それに若者が質問をするのは好まれないのですよ。人の話を立ち聞きして憶えたり、とにかくそんなふうにして物事を理解するようになるんですね。

鮭を欲しがって泣くが生れて二十日間、この子の父親は家の中の「煙穴」の下に居なくては

10) Ten'a. アラスカ西南部のアンヴィックに居住するアサバスカ系イヌイト。アンヴィックはユーコン河の支流のアンヴィック川沿岸の村であるが、河口から400マイル、ベーリング海から125マイルの距離にある。アサバスカ系先住民の中では北限に位置するこの部族をロシア人は、エスキモー語で「シラミのたかった人、汚い人」を意味する“インガリック”または“インギリック”と呼ぶが、先住民自らは“ティネ”，あるいは“テナツ”と称している。なお、アンヴィックという名は、現地では“グドリネスチャックス”，「真ん中の人」の意味の場所を表す名で、他の川沿いの村もまた同様に呼ばれている（原著「アベンディクス」より）。

11) after-birth. 出産後間もなく排出される胎盤・卵膜・臍帯など。

ならない——イグルー<sup>12)</sup> や地下の家に暮らしていたときはそういう言い方をしたものですよ。

今は、ほとんどみんなが木造の家に住んでいますけど。この二十日間は白人の作ったもの、特に鉄やスチール製のナイフとか斧とかアイスピックなどに触ってはいけません。海岸から持ち込まれた交易品の銅は、溶かし鍛えてからなら使ってもいいんですが。木や骨で作った皿で食べますし。どんなものでも仕事の道具は使ってはいけません、どうしても薪や獲物を取りに森に行かなくちゃいけない、そんな緊急の場合以外は。こんなときは、まず、ディイン、つまり<sup>シャーマン</sup>祈禱師のところへ行行って状況に見合った歌を貰います。この歌のために、ほかの歌のときもそうですが、祈禱師には高い料金——毛皮とか肉とか脂で——を払うんですよ。

二十日以内で外出するときは水辺、小川とか湖を通らないように気をつける必要があります——オスラング<sup>13)</sup> になりますし——魚は子供の肌に発疹を起こす原因になりますから。わたしどもの皮膚はたいいてい、とても滑らかだし、しみがなくて、誰か発疹とか吹き出物が出れば、それはオスラングのせいだとわかるんです。

鮭を欲しがって泣くが春に生まれたら、父親はその年の秋は絶対ウナギ漁には行きません。これもオスラングになりますし、ウナギの不漁の原因にもなるんです。家族の中に死人が出ても一、二年はウナギ漁に行きません。わたしたちの食生活がどれほどウナギに依存しているかがわかれば、これほど気をつけなければならぬ理由がおわかりになるでしょうね。ウナギが最初に上ってく時期はまず、ラッシュ<sup>14)</sup> という冬の主食になる魚の胃袋にウナギが見つかることでわかります。村から数マイルも離れた川で誰かがラッシュの中にウナギを見つけたら、直ちに知らせ、村の男たちが川幅が狭くなってウナギのよい餌場になりそうないろんな場所まで見張りに行きます。そんなところは川の水が盛り上がるほど群れているので、棒で引っ掛けて岸に放りあげさえすればいいんですよ。こんな具合に、よその家族で出産とか、死んだ人があっても、ウナギ漁に来たんだから、ああ、もう一年たったんだな、とわかるんですね。

子供が誕生した後、男は仕事と同じように娯楽にも参加してはいけません。頭を下げてただじっと座っているだけなんです、それはこんなときは、男は自分の精霊たちと交流していると考えられているからです。霊たちには、この人が所有する最強の歌とほぼ同じくらいのパワーがあるので、霊を怒らしてその歌が力を失ったり効き目をなくしたりしないように、また決まりを破って赤ん坊が死なないように気をつけていなくてはなりません。

鮭を欲しがって泣くが幼い頃に落ち着きがなくて泣いたりしたら、母親は必ず「リア！ 悪

12) Igloos. イグルーとはカナダ北東部のエスキモー（イヌイット）が冬季に住む雪小屋の名称。

詳細は次章、IXエスキモーの冬、本稿83頁参照。

13) 原文はothlang. 以下、本編で頻出する“タブー”（禁忌）に相当する用語。

14) lush. 何の魚かは不明。

霊が来るよ！静かにおし！」と怒鳴ってこの子を脅したはずです（誰かを罵るときは、リ、デニア！つまり悪霊の血だぞ！と言うでしょう。）

鮭を欲しがって泣くが歩けるようになると、父親か母親は絶えず注意して見えています。家族の幸福に関連するものが床の上に落ちているかも知れないので、その上を踏んづけないように、まず初めに教えておく必要があるのです。例えば、弓矢とか、魚取りの罠に使われる棒があれば、それを避けて遠回りして通らなければなりません。ところが男の子の方は、自分を守ってくれる精霊が女の子のものよりは強いので、何を踏んでもいいのです。

それで女の子は少し大きくなると、床の上の物に落ちているものは——残飯とか骨とか羽とか髪の毛、皮膚とか——どんなものでも極度に気をつけるように教えなければなりません。女たちはこんなゴミクズや廃棄物を別々に分けて籠の中に入れ、それらが属する生き物らが入り出す森や川に戻してやるのが習慣なのです。鮭を欲しがって泣くは母親と一緒に行ってカヌーから家鴨や鶯鳥や白鳥の羽が本来属していた元の鳥に戻れるように川の中に捨てられるのを見ながら、それらの羽が流れに乗って下っていくうちに——この子の眼には見えませんが——もう一度鳥の姿になって昔の餌場である泥やヤムグラ<sup>15)</sup>に帰って行くのだと教えられるわけです。同じようにこの子は母親が魚に戻れるようにその骨を川に返したり、狩りで取ってきた動物の骨を森に持っていくのを見たことでしょうね。こうした骨が床の上に落ちたままになっていてその上を踏みつければ、それがオスラングです。

ときどき男は床の上で両足の踵を尻に付けて座ったり、左足を右足の上に乗せ足を組んで座ったりするときなど、食べ物を容れた鉢を両脚の上に置くことがあります。こんなときに折った動物の骨は指で容器に戻される代わりに、床に弾け散ることがよくあります。これは家の守り神である精霊が食べ物を欲しがっているのです。食物の精が、この家の精霊の飢餓を満たそうとしているのです。でもこの破片を拾って森に持って行っても、<sup>パワー</sup>力はなくしているのでもう、動物には戻れませんけど。

われわれ男がカラフト雷鳥<sup>16)</sup>とか、エリマキ雷鳥<sup>17)</sup>を殺せば、その尾羽を抜き取って地面に撒きますよ、そうすれば森へ戻って再び鳥に帰れるからです。私が初めて雷鳥を射止めたとき、尾の上の羽を抜いたことを憶えています。仲間に笑われました。「そうじゃないよ」と彼は言います。「おまえが取るのは尾羽なんだ」。雷鳥を<sup>ミッション</sup>伝道師会に売る際には、まず、鴨や家鴨を売るときのように羽を筆り取ってから内臓を抜きます。同様に兎を売るときにも、毛を筆り取って内臓を抜き取るのですが。（何か祝賀会をやる前に男は兎狩りをします。まず、ある島

15) Goose grass.

16) willow grouse(ptarmigan).

17) ruffed grouse (ptarmigan).

や岬を目印にして、仲間を見失わない距離を保ちながら、そこから徐々に範囲を広げていくのです。大きな叫びを上げ、木を叩いて兎を誘い出し、輪を描きながらそれを次第に狭めて水際まで追い詰めていく。祝宴用に大部分は保管しておき、残りは売ります。) 熊肉も山猫の肉も白人に売るとは決してしません。

夏には兎の肉は食べませんが、鮭を欲しがって泣くも他の子供と同じように、きつと夏の兎は虫食われが多いということは聞いているでしょう。この子はまた、暗いところでは決してものを食べないように聞かされています。それは持ち主のところへ帰ろうとする悪い霊の片目を、知らずに呑み込んでしまい、その霊に絞め殺されないようにするためです。それと、肉を食べるときは歯で噛み切らないようにしなければいけません。お茶とか液体を注ぐときは、縁までわずか1インチくらいのところまでに留めて決して零さないようによく気をつけるように教えられます。もしコップから湯水が溢れたりすれば、それは淹れている人にとってオスラングになって——獲物を追いかけるときに失敗したり、魚は取れず、指導者としてもうまくいきません——これを克服するにはシャーマンのところに行って歌をもらってこななければならないでしょう。

女の子はこんな些細な事をどう扱ったらいいのか、そんなときどんなふうになるのか、覚えなくてははいけません。若い男は雪靴を作ったり、獲物、狐、鹿を追いこんだりする能力によって評価されますし、カリブーも白人の輸送団に追い払われるまではそうでしたが。女の子は手工芸品や食べ物を用意する能力を問われますけど、やはり家事能力で評価を受けるのです。能力に恵まれ人柄もよい女性は、成人すれば同じ階層の中で世代から世代へと受け継がれて行く儀式や何かで、優れた獵師を表彰する際に使われる古びた木鉢の管理を任されることになるでしょう。それに、よく気の付く女性からの贈り物は歓迎されます。みんな、成人した若者が、何でもない人が作ったものを着ているのを見るのを嫌がりますよ。仮に気配りの行き届かない女が作った手袋とかブーツ、パルキ (シャツ) を身に着けたりしたら、その男の能力までがすり減ってしまい、精霊の力も弱まるかも知れませんから。

鮭を欲しがって泣くはほかの男の子も女の子も同じですが、食事中は決して歌ったり口笛を吹いたり、冬の間ではどんなときでも夏鳥の声の真似をしてはいけないことを教えられています——冬を伸ばすことになるし、二冬も続く (これは既に短い夏が更に短縮されるという意味で、この語り手がよく用いる表現である—原著者) ことになって飢饉を引き起こすことになるからです。それに鮭を欲しがって泣くは決して雪玉や雪人形を作ることもしません。雪だるまを作るのはただ一度、春になって冬のような酷寒期を望むときだけです。旅をするものは家から遠く離れて春の洪水にぶつかるのを怖れています。私はよく憶えています、暖かくなったある春の日にアンヴィックには大勢の商人がいました。みんな漁のための小屋や魚網の準備で家に帰らねばなりません。この中にはツンドラや森の中を20マイルも荷物を運ぶ犬橇



を持っている人もありました。森や泥濘の軟かい雪で犬は疲れ切ります。そこで祈禱師のところへ行って許可をもらい、北に向かって雪だるまを作り、その方角から冷たい風を送ってもらうのです。冬から春にかけての、この季節の変わり目に生まれた未婚の男性が選ばれて、雪だるまを作ったものですが。

子供たちは雪合戦はしないかもしれませんが、他の戦争ゴッコをして遊びますね。ほとんどどんなことでも遊びの材料になりますよ。子供は別の子の家族のことを汚いとか、「オレの父ちゃん、おまえんちの父ちゃんより毛皮をいっぱい持ってるぞ」とか言うかもしれません。そうすると、連中は<sup>ファイヤー・ウインド</sup>ダンドポロギクを集めて葉っぱを筆り茎だけにして槍とか投げ矢に使います。この武器で敵の額の皮を剥ぎ取るわけですが、血が流れれば流れるほどいいのです。またどんなに強く当たっても決して泣きはしません。二、三人が死んだふりをして女の子が哭く役目に回り、その後で祝宴を開いて仲直りします。

男子はまた、鴨狩りや鹿狩りをして遊びます。草で鴨を作り上げると、それを細長い棒に括り付けます。それから泥沼かなんかに浮かべ、それを狙って短い木槍を投げつける。

このゲームは春以外では遊んではいけないんですが、それはもっと遅くやれば、飢饉をもたらす虞れがあるから、なんです。でも実に面白い遊びですから、季節外でもわれわれ男子は水桶をかついで森に行って大人の目につかないように鴨池を作ったものですよ。

<sup>ディア・ストーキング</sup>鹿「追」いという遊びをやる時、男の子は草を束ねて鹿の形にします。中に干し鮭の切身の屑を詰めて腹部にするとすね、棒の上にその鹿型を立てておき、それから切り株やら草の茂みに隠れるんですよ。誰かが「鹿がいる」と教えます。「どこに?」「ほら、あそこ」。腹這いになって近づきます。それから弓矢を放って心臓から一番近いところに当てたものが、鹿殺しということになるんです。鹿の皮を剥ぐ間もずっと話をしています。「どのくらい距離があった?」とか「そんなにすばしこかった?」「捕まえるのは難しかったよ」。鮭の干し身を取り出しながら、これを鹿殺しが切り分けて、ちょうど大人がするように肉が狩人全員に行き渡るように取り仕切るのです。男が長期間の首尾よく成功した狩りから戻ると、<sup>カヅジム</sup>カヅジムに行きますが、その妻は食事の準備をし、部落全員に声をかけて、食事に招待します。一軒一軒廻り、「さあー、おいでよ、一緒に肉を食べようよ」。(この際、肉というのはいつでも熊肉のことを意味しています。一番強い動物の肉ですから。その他の肉の場合は、<sup>ボーキューバイン</sup>鹿肉、やまあらしの肉とか言います。)同じようにもし、女が仕掛けた罠に魚がたくさん獲れたら、やはり全員が呼ばれます。

幼児のころは男女一緒にままごとや魚釣りの真似事をします。男の子は柳の葉を集めて1,5フィートの厚み、長さは15フィートにもなる大きな束を作ります。小魚のいる川の浅瀬を選んで楕円形になるようにこの柳の罠を仕掛けるのです。魚が掛っていたら、女の子が外してこれを料理し、大人の男女のようにペアを組んで<sup>フィッシング・キャンプ</sup>漁「場」を作りに出掛けます。わたしが十歳のころ、鮭を欲しがって泣くとペアを組みました。この子が植物の根から籠を編んで草で人

形を作ったものです。それからこの人形に歌を唱いかけ、あやす素振りをしていました。わたしは森の中に行き、樹皮や薪を集めて来ました。リスや小鳥を弓でし止めると、**鮭を欲しがって泣く**がこのリスと小鳥の皮を剥いで料理したものです。二人で宴会を開く**カヅム**まで作りました。冬になると、わたしたち子供は雪小屋を建て、兎に罌を仕掛けそれに乾燥肉や鮭を少々、家から盗んで来ましたね。見つかるまでは盗みにはなりませんけど。でも冬場の狩のことは割愛します。

男女ともに子供たちが、村の部族の一員であり、村に所属できるように祈祷師のもとに預けられる時期のことをお話しましょう。その折に、儀式があることは知っていますがそれに関してわたしはよく知りません。わたしはその時分はミッションスクールの寄宿舎に入っていましたから。子供たちはまだ小さく、四歳か五歳のころです。ですから、もし家族に何事か起こった場合は、村が面倒をみますし、その村の慣習に関して子供たちができるだけたくさん学べるようにするには村に責任があるのです。男子には老人が教えますし、女子には老婆が教えます。昔話とか古い話を子供たちに語って家では学べないようなことを教育するわけです。もちろん、こうした物語は**カヅム**では夜以外は話してはいけないことになっていますし、大祭に備えて**マスク**仮面を作ったり、歌の稽古をする直前の、冬の初め以外はけっして話されることはありません。こうした言い伝えの多くは、誰も決して殺そうとはしない鳥である**鴉**<sup>レイヴン</sup><sup>18)</sup> についてですが実は、この鳥は何にでも姿を変えることができるし、足で地面に窪みをつけてユーコン河を作り、土を運んで丘や山を築いたりしたからです。また多くの話が町の起りについてとか、たった二人だけ殺されるのを免れた夫婦によってどのように始まったのか、今の時代まで何が起こったのか、そんな話です。誰も聞こうとしない話をするのは具合が悪いので、一言二言喋るたびに、うん、うん、とか誰かが頷いて聴いている人がいるのを示す必要がありますがね。

わたしはほとんど知りませんが、名前を付けてもらう儀式というのもあるんですよ。人間は仕事とか、その人の性格とかで名前を付けられるといってもよいかも知れません。わたしが知っているある少女は**腫れた顔**<sup>スオルン・フェイス</sup>と呼ばれていますし、**指差し**<sup>ボインディング・アット</sup>という名の子もいます（この子は左手の人差指で人を軽蔑的に指す嫌な習慣がありました）。それから**誰も気に入らない**<sup>ダズ・ノット・ライク・エニワン</sup>（つまり求婚者をすべて断るからです）というのもしれば、また**悪霊も嫌う子**<sup>ワン・イーヴィルワン・ダズ・ノット・ライク</sup>というのもあります。これは病気になったこともなく、流行病に感染したこともないのでこの名前をもらいました。視力はいいし、心が広く籠作りも網を縫うのも上手で、兎に罌をかけるのも得意で、朗らかな顔をして人の役に立ちそうで、蔑んだような眼で他人を傷つけるようなのと正反対なので、他人には一目置かれていました。わたしは**にじり寄る男**<sup>ヒー・クリーブス・トワード</sup>と呼ばれていた人を知ってい

18) このテナツ族が属するアサバスカ系先住民の間では、鴉は超自然的な創造者であるだけでなく、トリックスターの存在でもある（エルドエス/オルティス下 98-100; Erdoes/Ortiz344-346）。

ますが、これはこの人が、何かに忍び寄るような格好でこっそりと歩く癖があるからなんです。このように名前が付けられる理由とか、名前が意味するところがあまりにも大きいので敬遠され、実際にはあまり使われることはありません。遠回しに言うということです。ある人が「ほら、ここを見よ！」と自分の子供に向かって叫んだとします。その子は父親の声がわかっていますから、自分を呼んだのは父親だとすぐわかるのです。ミッションスクールの子供が村の子をその名前で呼ぶと、大変腹を立てますね。

**鮭を欲しがって泣く**が大きくなったときに話を進めましょう。初めて月経を迎えたときは、父親の家の隅の方に移されて若い男たちから姿を見られないようにされますし、我々のやり方の月齢で一年間はそんなふうに置かれます。**鮭を欲しがって泣く**に割り当てられた場所はちょうど横になれるだけの広さです。この隅っこに**鮭を欲しがって泣く**は身の回り品のすべてをここに保管しなければなりません、特に自分の茶碗とか、バケツなどです。周りに誰もいなければ、このバケツに水を入れても構いませんが、ほかのものと同じように若い男が何かの拍子に接触しないように十分に気をつけなければならないのです。女の子はまったく戸外には出ないものとされていますが、万一、出なければならないときは頭を下げ、若い男のそばを通り過ぎる際は視線を決してまっすぐに合わせないように、また眼を向けられないようにしなければならないのです。それも**オスラング**に相当するのです。その男は狩猟や漁の能力を失ってしまうでしょうし、わたしが社会的能力と呼んでいるもの（例えば、無駄口を省く目的で、発言上の諸規則を設けてある会合の席ではどうやって話してよいかもわからなくなる）さえ無くしてしまうでしょう。**鮭を欲しがって泣く**が、まだ隅っこにいるときでしたが、わたしは一度その家にお邪魔したことがあります。白人のようにわたしらはドアをノックしませんが、いつものように「フィフファイフィフィフィ」と震えるような音を出して、ちょっと時候の挨拶をしながら、「まあ、腰を下ろしてちょっと食べていったら」とか言われるのを期待して——お客には食事を出さずに帰すことは許されませんので——中に入ることもできたでしょうが、**鮭を欲しがって泣く**の父親は私が戸口に近づいてくるのを見て「**カジム**に行こう」と言いました。わたしにはその意味がわかりました。隔離中の娘からわたしを保護してくれたのです。

隅にいるとき娘は、なま爪を結んだ**ビーズ**の帯を常に額に巻いています。この間の行動で、将来この子が価値ある女性になれるかどうか、また家事に優れた技量を身につけるかどうかが決まるのです。それは、結婚後に使用するものはなんでも、このときに作るからなのです——ここ（ハンプトン・インスティチュート）の生徒たちはそれを**衣類箱**<sup>19)</sup>と呼んでいると聞きました。裁縫を覚えたり、**ビーズ細工**、**ヤマアラシの針細工**、籠や網作りも覚えます。初めの数か月は、料理するのは認められませんが終りが近づくと、料理に加えて、山のように家

19) hope chest. 少女が嫁入り用品を入れておく箱。

事が課せられるのです。それに求婚者がこの子の仕事や能力に注目するのもこのときなのです。彼らは、この子が作ったブーツやミットンの縫い目がしっかりして長持ちするか、ピースの刺繍は綺麗か、勤勉で有能か、身持ちは堅いかなどに注意します。男は自分の幸福に関していかに妻の性格が重要であることを知っているのです。狙った獲物は追いかけますが、結婚してしまえばもう、それっきりです。重労働はすべて妻が引き受けます。薪拾い、水汲み、雷鳥や兎や魚に罠を仕掛けるのも、それから家族のためだけでなく、男が力を貸すように要求される儀式のための衣類、食事だって全部、妻が用意をするのです。

でも女性が成長して生活の変化が訪れるまでの、いわゆる女性に関する一般的な問題についてもそうですが、まだ人生も初めの段階、つまりはその少女時代についてもまだお話しすることがたくさんありますよ。もし、我々が漁場でキャンプを張る夏にある少女が隅っこに行くようになったとしますと、その家族は冬の宿営に戻るときおそらく川を渡ったり、沿岸を行ったりすることになるでしょう。わたしは憶えています、**鮭を欲しがって泣く**の場合にもそんなことがありました。父親は祈禱師のところへ言って相談しなくちゃなりません。<sup>サーモン・クラブパー</sup>**鮭叩き**のところへ行っただけですが、この人物は二人の妻と、それから彼の仕事に従事する他の数家族と一緒に、アンヴィックから20マイルほど離れたところに住まいを構えています。**鮭を欲しがって泣く**の父親は、相談をする代金としてこの**鮭叩き**に、魚入俵を何俵か、アザラシの脂、それから鹿皮を渡しました。すると、**鮭叩き**はトランス状態に入り、このときの夢の感じがよかったので、家族が動いてもよいという許可を与えたのです。**鮭を求めて泣く**はカヌーの舳先に座って、頭が**舷縁**<sup>ガン・ウエール</sup>の上にならないように蹲っていなければならないし、顔には覆いを被らなくてはなりません。この規則を守っていなければ、あとで吹き出物が一面に出てきたはずですよ。

もし誰かが既に鴨や鷺鳥狩りに出かけておれば、ここでは漁の季節が終わるとそうするのですが、**鮭叩き**は許可を出すのを見合わせていたでしょうね。ご存知でしょうが、鳥や動物は「隅っここの」女性に敏感なのです。動物に尊敬してもらうには、人間はそれらを唱う歌を尊重しなければなりませんよ。1917年に帰郷したとき、わたしは鳥射ちに出かけました——春のことでした。わたしは鴨と鶴を一羽づつ、他の5人もまた、いつもよりずっと少ない数しか獲れませんでした。帰りに年配の一人が私にこう言うのです。「あのなあ、おまえは本当にオレたちの規則を知っているのか。オレは祈禱師と話をしてきたんだが、あの御仁が言うには、女の子の水浴びしているところでおまえが泳いでいる姿を見たと言うんだ。三人ほど生理中の子がいると言っている」「どうしてわかったんですか?」「いろいろやり方はあるさ」それから、この人はボクらには意味はわからないけど、年配の人がよく使う言い回しの一つを言いました。この人たちは物事の外形しか言うてくれません。自分らが考えるようにボクらも考えればわかるだけのことは話してくれるわけですよ。この人は続けて「狩の獲物が極端に少ないのはそのためだよ。雪が降って強い北西の風が吹くのもな。おまえを外すこともできたけど、みんな、おまえのこ

とを大事に思っているし、友人として話しているんだ」。もしもわたしが頑固もので、このときを初めいろんな機会をとらえて忠告してくれることを理解しなければ、あちこちの村に噂が広まって有名になり、たぶん、嫁さんをもらうのもむつかしくなるでしょうね。

この年配の人はもちろん、ミッションの子は昔ながらの規則を無視しがちなことを知っているのです。例えば、男の子が女子寮の地階に入りこんだりするところを見たことがあるのでしょうか。むろん、厳格な掟に違反しています。つまり、女の人は老年になるまではアンフェイバラブル・ステータスアンフェイバラブル・ステータス「好ましくない地位」に置かれているので、決して男より「頭の上」に立ってはいけません。春になると、どの家族も漁場に移動して、そこでこれから使うカヌーとかボートとかを作って季節が始まります。木を伐るときには大鋸ウィップソウを使いますね。ここで男と女が、一緒に伐っているとき、男は必ず鋸の高い端の方に立たなければならないし、女は低い端にいたってはいけません。同様に、魚をキャッシュ、つまり柱を組み合わせた貯蔵庫にしまうときも男子は頭の上の仕事をやらなければならない、女子は男より高くなるように棚に上がってはいけません。カッジムでも女は床に座っていますが、男はそれよりも頭の位置が高くなるように寝台にも使われるベンチに腰をかけます。ミッションハウスだけでなく、アメリカの二階建ての設計図で建てられる家では、この「男性上位」オーバー・ヘッドの原則を守るのはむつかしくなっていますけどね（原注1 外来文化との接触を原因とする物質文化の変化によって習慣や信仰が、いかに影響を蒙るかという、何と興味ある例証であることか！）。

繰り返しますが、女性がまだ、若いあいだは出産時に同席してはいけません。また、ある種の鴨や、その卵を食べてはいけないうし、肉類、例えば熊肉も食べられません（原注2 J.ジェツテ牧師は熊に対する特別な恐怖はテナットの婦人に普遍的なものであると述べ、この恐怖は熊が女に特別敵意をもっているものとして描かれている、熊の民話によるものであると結論している。しかし逆に、この説話の方が恐怖の結果であるという見解もまた、ありうる）。

生理期間の一週間に若い男が、もしその家の中に入ったり、留まったしたら、その女性は子供を産むときに苦しむことになります。だから、このようなとき、妊婦の夫も産褥を離れてカッジムに行き、そこで男の子や、若い男と一緒に寝るのです。男の子も勇気がある子はすぐに母親のもとを離れてカッジムで暮らしますよ、十四か十五歳くらいになればね。度胸の据わったものは、もっと小さいうちに行くかもしれません。でも意気地のない奴は十八歳くらいまでダメですけど。

この期間、少女あるいは婦人は、もしできれば自分の体から男性を守ろうとするものです。例えば、男の子が取っ組み合いを仕掛けてくれば——大騒ぎする、とでもいいですか、白人流にはやらないかもしれませんが、男の子が女の子と相撲を取って投げ倒したりひっくり返したりして、もっと賑やかでもっと激しいものですよ——当の女の子はもしその期間にあれば、相手の顔に爪を立てて自分の身から離れるようにするのです。その、引っ搔れた顔を見て理由を

察した大人は大笑いをしますがね…。

一度、**鮭を欲しがって泣く**の母親が祭儀の折に、**カッジム**に入ったことがありますが、これは亡くなった親戚のことで、祈祷師に報酬として渡そうとしていた毛皮の上で踊ってくれるように要請されたのです。何故か躊躇っている様子なので「やってくれ。どうしたんだ？」と誰かが尋ねました。つまり、生理中だったのです。「大丈夫だ。毛皮の端に立つんだ。元通りにしてあげるから」とみんなが安心させましたよ。母親は**鮭を欲しがって泣く**を隣に立たせ、二人は視線を床に固定し、この踊りに要求されている両手を動かしながらの、自分の踊りを踊り終えたのです。このようにして、**鮭を欲しがって泣く**も母親の所有するダンスを覚えたわけですよ。

踊り手は誰もそうするのですが、この娘と母親は**カッジム**の戸の正面に向きました—二つのドアがあって、外側は力を示す熊皮、約4フィート距離をおいてその内側には、速さと技量を表すクズリ<sup>20)</sup>の毛皮の戸があるのです。戸と戸の間の4フィートの空間は、四つん這いで入って来る人間を容れたあとに初めのドアが締まり、続いてリー、悪霊が入ってくる前に、二つ目のドアが閉まってこれを閉め出してしまうためですよ。仮面がドアの覆いの下に並べられると、みんなが正面を向きます。**カッジム**の煙穴には熊の腸の覆いがあって、その下の床の真ん中に火が置かれます。**カッジム**の中はいつも暖かいですね。最初に炎が燃え上がると、薪を焼べてその炎を鎮めます。

少女が隅っこの期間を終えると、**カッジム**で儀式を行います。両親か、求婚者のどちらかが新しい**パルキ**を贈ることは知っていますけど、わたしはこの儀式を見たことはないの、それ以上は申し上げられませんが。

今も言いましたが、女の子は隅っこに行くかどうかのその前から、求婚者が、つまり若い男ですが、目を付けて自分の妻にしたいと思えば、その子の家族のために働きます。薪を切ったり、水を汲んできたり、獲物の大部分をあげたりするのです。両親から関心をもたれるほどのことをすれば、この男は承諾されるわけです。当の女の子には何も言う権利はありません。たとえ、男を気に入っても、父親が十分な働きを示さなかったと考えると気に入らなければ、この女を貰うことはできないのです。その一方で、女の子の方が相手を好きでなくても、親父が気に入ってしまうことだってあるのですよ。**鮭を欲しがって泣く**は隅っこから出るとすぐに、父親が気に入った男と結婚しました、非常によく働いたものですからね。これは、**スレガッス** フィッシュ・スキン・ハット **ツオックス**、つまり、**魚皮の帽子**という男で、**ロフタク**を渡したあとで、祈祷師——おそらくそれは、村の長でしょうが——の承諾を得なければなりません。**鮭を欲しがって泣く**は魚

20) 原文では wolferene. wolverine のことか。クズリは北米産イタチ科の肉食動物、またはその毛皮を指す。

皮の帽子が好きではなかったのです。魚皮の帽子の父親はケチでしたが、この男自体は能力も力も持った好人物で——歌も幾つか買っていますし、この名前は普通のものではなかなか手には入らないでしょうね（こういう名前を手に入れるには、男は力も持たなければならぬし、また、その力に相応しい生き方をしなければなりません）。

鮭を欲しがって泣くの両親はこの子は、罾掛けも、魚釣りも上手だし、一日で捌く魚の量も、裁縫の腕もよくて速いのが高く評価されているので、いずれは有能な女になるだろうから、亭主の方も同等に能力の高い、狩りも巧いし、毛皮の保存も取引もできる人にすべきだ、というふうに思っていました。両親はまた、鮭を欲しがって泣くがもし、いい旦那に巡り会わなければ、この子の人生は奴隷のようなものだ、とも思っていたのです。主人のためばかりでなく、その家族や親戚のためにも働かなければならないからです。最初の二、三年間、女は夫とその両親の家に住むことになるでしょうが、それから夫が家を建てて妻を住まわすものです。両親の家の近くになるかも知れませんが、夫のものです。主人と喧嘩をして叱られ叩かれたりすれば、家を出て、自分の両親の家に帰るか、祖母や近親のところへ行行って夫が迎えにくるまでそこにいるでしょう。

魚皮の帽子はアンヴィックの者ですが、鮭を欲しがって泣くは、夜、会いにやって来るようになるまでは、ほとんど会ったことはありませんでした。もっと年上の男女は、昼間一緒に歩き回ることはありませんし、カヌーを二人で漕いでいるのを見かけることは決してありません。道端で会っても少女は話しかけることは絶対ありませんね。話をしたければ、暗くなってから、あるいは屋根の下だけです。屋根の下では必ず「誰かが見張っている」からですよ。

氷が割れて、みんながテント小屋で暮らすようになって、女の子を手に入れたくなる頃、彼女が寝ているテントの外壁からこっそりと忍び込んで、朝方に鳥が騒々しくなる頃、ふたたびこっそりと外へ出るのは、責任ある人は、娘のもとに誰かが忍び込んでこないように気を付けています。しばらくあとで公然の仲になるような場合、例えば結婚相手のような場合は別ですが。両親は娘に常に言います。「自分の身は自分で守らなくちゃ」。意中の男とは違う男が入って来て予め決められた通りの合図をしなかったら、例えば抱き方が違っているとかですがね、女にはわかりますから、両親は娘が声を上げて、家族を起こすとかいうことを期待します。しかし一世の中には、あまり気にしない人もいますし、あちこちつまみ食いをする若い男もいますからね。ときどき、娘と結婚しろと迫って若い男を面食らわせる親もいます。娘が「中に引き入れた男に」よって妊娠したと言うわけですよ。こんな場合、結婚しないと言い張る男は、他の女にも相手にされなくなりますね。

祭儀、式典の折に、青年男女は正式に出会うのです。族長が、娘を若い男に指名してパートナーソハルディドと言いますが一にするのですよ。わたしが1917年に帰郷したときに族長は、三人の娘をわたしのパートナーに指名しましたが、三人のうちの二人、鮭を欲しがって泣

くと、それからもう一人が承知してくれました。祭儀の合間に、パートナーの娘が家に招待して、お茶や季節ごとに手に入る食べ物、熊とかカリブーなどを出してくれるのです。食べきれないものは持ち帰るように期待されるくらいで、その娘は気前のよさ、つまりそのサービスによって判定されるのです。もの惜しみせず、実に気前よく、食べ物が食卓に並びます。例えば、<sup>ベア・フィースト</sup>熊 祭り で給仕した女性は、わたしが食べた量の十倍のものを出してくれましたよ。(食後に手を洗うために水桶と、食べ残したものをきちんと持ち帰れるように布を用意してくれたのも忘れられません。)ところで、祭儀の一つ、踊りの大会で<sup>リーダーズ</sup>世話役は報酬を要求します。連中にものを渡すと、短いのを踊らしてもらえるのです。あるとき、わたしが踊る番が来たとき、二人の女性が、わたしが踊れないものと思ったのでしょう、頼みはしなかったのに立ち上がって代わりに踊ってくれました。一人が、熊の歌を、他の一人が狩の歌を貰いましたよ。わたしは大量のお茶をあげました。自分以外の出席者全員に一杯ずつ振る舞い、余ったものをまず祈禱師に、つぎに長老たちに、というように。また、あるときのことでした<sup>21)</sup>。わたしは麻糸の一枷、斧一丁、スティールの罫、大きな魚を二匹貰い、アザラシの脂と苺、骨抜き魚と雪を混ぜたアイスクリームを少々御馳走になりました。こんな冗談を言う人がいました。「アイツには既婚者も同然、たくさん、やったんだから、年寄りの亭主を欲しがっている、そこらの婆さんの中から、何人か嫁に貰ってやるべきじゃないか？」わたしはアイスクリームは好きじゃなかったから、パートナーは常にそうするのですが、わたしの貰ったものを運んで片付けてくれる、**鮭を欲しがって泣く**にあげましたけど。女は男たちに御馳走を振る舞いますが、このとき女は踊り、物を贈ります。この踊りの合間に食事に招待するのです。翌日、今度は男が女に御馳走する番で、女たちが存分に食べれるように配慮するのです。わたしはここで、こうした宴会とか、祭儀に対して男が示す興味こそ、族長になれる条件だと言いたいのです。こんな機会、あるいはそのほかの機会に(われわれは他人を援助できるときはいつでも、援助することが期待されるのです)もっともよく手助けするものが族長としての資格を持っているのですね。

ソハルディド、あるいはパートナー同士の関係は永く続きます。パートナーの住んでいる村に帰ってくるたびに、援助してくれます。でも未婚の女子だけでなく既婚の女性もパートナーに指名されますから、ときにはこれが主人との間で<sup>ト ラ プ ル</sup>厄介な問題を引き起こすこともあるのですよ。でもわたしが記憶しているある事件は、すべて伝道師さんの行動に責任があるのです。二人の男は、どちらも相手の妻をパートナーにしましたが、数年後にこのパートナーを妻にすることに同意しました。つまり女房を交換したわけですね。五年後、伝道師さんがこのことを聞きつけ、もうそのときには、女の一人が死んでいたのにもかかわらず、もう一人の女を初めの亭主のもとに帰るように決めてしまったのです。

---

21) これはいわゆる“give-away”(与え尽くし)という行事であろう。



保安官とわたしを連れて、伝道師は夜、ムーリーの元を訪れました。「誰だ！」とムーリーは怒鳴りました。「用事があるのなら、わたしのするようになぜ、お天道様の照っている間に来ないのか？」女房が対応にしました。訪問者が敵かもしれないので、いつも家内が対応をして亭主を守るのですよ。伝道師さんは、保安官にその場でムーリーを逮捕させたがっていました。「オレが白人みたいに逃亡すると思うのかね？」ムーリーは訊きました…。結局、ムーリーは60日間、もう一人は30日間、女は6ヶ月も拘留されましたが。「まったくわけがわからないよ」。ムーリーはわたしにこぼしましたよ。「アイツも満足していた、オレも満足していたし、あの女も満足していたんだ。なのに、おまえらがやってきて全部ぶち壊しにってしまった」。ムーリーは出てくると女に差し入れしたりして女が出てくると、二人はまた一緒に暮らすようになりましたがね。

いろんな儀式のうちに、長老たちはわたしがもう十分、必要なものは受けたことを見て取りました。四年間も留守をしていたので、村長と同席させてくれたり、みんな、あの手この手でなんとかわたしをこのアンヴィックの村に引きとどめようとしていました。女たちは苺摘みをしますが、そこでわたしを家に招いて苺を食べるように誘います。また男連中もわたしを招きます。あるときは族長の一人が、狩りの帰りにわたしに会って、家に食べに来ないかと言うのです。でも今から来ないか？とか、さあ、行こう、とか言わず、ちょっと待ってくれ、と言うわけです。わたしを直ぐに家に誘わないのは、さてはこれは、「隅っこに」娘がいるんだな、と察し、わたしにこの娘の求婚者になってほしいんだな、ということがわかりましたよ。族長はわたしが同行して、戸外でこの娘のことを訊かれるのを恐れていたんです——それもオスラングになりますからね。

ある老人など、一度ならずわたしにこう言ったものです。「オマエの世話もきちんとしてくれ、また村の習慣も守る気立てのよい娘と所帯をもったオマエの落ち着くところを見たいんだよ。ミッション出の娘と一緒にするのは見たくないね。碌なことにならないよ。アノ連中はプライドを失くしているからだ」(ミッションスクールを卒業した女の子は服も作らなくてもいいし、<sup>さき</sup>将来を見る必要もありません。飢饉のためにわたしたちは常に先を見て用心をしています。村人は身一つの状態にまで落魄するのを非常に警戒しているのです。ギヴ・アウェイで全部困っている人に施しをするのを除いては慎重ですし、気を付けています)。

この老人はなおも続けてこう言うでしょう。「男は女房次第だ。オマエはワシらの村の女を貰うように頭を使わなくちゃならんぞ。オマエがこの村のいい娘とやっていくなら、ワシらも何も言わん。夜這いだって構わんぞ」他の誰かが笑ってまた、冗談をいうかもしれません。「夜這いはいいが、<sup>ボウル</sup>鉢をひっくり返して泡を食って逃げ出すことになるかもな」。ミッション出だから不器用だと思っているんですよ。

部族のものは若い男が村の外から嫁を取るのを望みません。だから、息子が初めて動物を殺

すすすぐに、獲物を追いかけて、罾を仕掛けるようになるはず——十五、六歳くらいですよ——嫁を貰うように望みます。それに、よそものが求婚者になるのも歓迎しません。よそものは疑われます。男は自分の部落との関係を断つようなことはけっしてしませんね——例えば、式典の折など、各地を放浪していたものが帰ってきたとします、この人は自分の家族の中の元の席に着きますよ、妻の家族のひとたちがそこにいたとしてもね。外からも人が呼ばれます。使者が二人、招待状をもってよその集落に行きます。使者が付けている仮面<sup>マスク</sup>によって、こんどの行事が仮面劇か、降霊術の会か、単なる宴会かどうかがわかるのです。族長や娘たち以外はほとんど全員が殺された、昔の村同士の襲撃では、よそから来たものが元の村人に、ここは今、伝染病が流行っているとか、何かの理由で兵士が手薄になっているとかの弱点を知らせたり、食料を豊富に貯蔵しているとかを話して、妻の家族を裏切るかもしれないのです。だから、今でもよそものは警戒されますね。自分の村の娘と結婚しなければ、冗談を言われて——不快になるほど——ひどい冗談を言われますよ。

わたしが陸軍に志願したときはこう言われました。「おまえがワシらのところで死んだのなら、直ぐに魂<sup>タマ</sup>送りできるようにしてやれるが、戦場で体がバラバラに吹き飛ばされたらカキ集めなくてはならんぞ」

「怖くはありません」わたしは答えた。

「おまえは怖くないかもしれないが、ワシらは気を付けて欲しいのだ…。ミンクの毛皮を祈祷師にやったらどうだ。おまえのことは高く買っているから、お守り代も大して要求せんじやろう」。三人の男と、女が二人やってきてしきりに勧めるのです。とうとう、祈祷師自らがやってきました。こう言います。「何も払ってくれとは言わん。ただ、銃を二つ、交差させた刺青を背中に描かせてくれ」

「結構です」わたしは断りました。「白人の軍医に検査されたときに困りますから」

「なら、同じ絵が描かれたシャツをおまえにやろう。検査の前に脱げばよかろう」

「軍隊では合衆国が配布したのも以外は身につけてはいけません」

「よし」祈祷師は最後にこう言ったのです。「人目につかないところでおまえを守る護法をしてやろう」。二つの銃を交差させるという考えは、同種類の霊は互いに攻撃し合わないように、背中に描かれた銃と弾丸の絵によって他の鉄砲や弾丸<sup>たま</sup>は、絶対わたしを攻撃しないだろう、というものです。

それと去年のことですが、わたしがここでインフルエンザに罹って故郷に電報を打ってくれたとき、わたしの友人、鮭を欲しがって泣くは祈祷師に金で15ドル渡して、狐——この祈祷師のメッセンジャーですが——をわたしの元に遣わすようにしてくれました。

イタチやクズリ——クズリが最も強力なメッセンジャーです——はシャーマンの<sup>メッセンジャー</sup>使者になるようですが、一番よく使われるのは狐です。狐はすばしこく、またずる賢いですからね。

男子は同じ部落の女と結婚すべきですが、でも近い親戚、例えば「<sup>ファースト・カズン</sup>従妹」との結婚は通常ありません。実の姉妹との間ではオスラングになります。こんなことをすれば、「女はたくさんいるのに、度胸がないから自分の姉妹を相手にした」と言われます。もし自分の姉妹を相手にしたとすれば、この男は同時に別の女のことも考えるようになるだろう。そうなれば、姉妹は自分は代用品だったのかと怒り狂うだろう。本当に意志の弱い男の場合は、実の母親がその対象になることだってあるんです。それはあり得ることですよ。すべては暗闇の中のことで、誰も何にも言いませんし、ただ、誰かが来、誰かが出ていくだけですから。

鮭を欲しがって泣くには死んだ——ここでは「行ってしまった」と言いますが——兄がいます。この兄のことをお話しすれば、葬式とか、喪に服する習慣とか、葬送儀礼がおわかりになります。それと、鮭を欲しがって泣くの亡くなった親戚の女性のこともお話しいたしましょう。

しかしまず、鮭を欲しがって泣くの他の親戚のことからお話します。この人は初産以来、重い病いに罹り寝たきりで、二人目は望めそうもありません。月が欠け始めるころに、生理期間が重なるタイプで、この種の人は性格的に弱い人と考えられます。それで、たいていの女がそうしますが、月が満ちるころに生理期間が来る——朗らかで性格のよい女性はこの期間に生理を迎えます——ように矯正してもらいに祈禱師のところへ行きました。それと、この人は月経が止まらないために、ひどく怯えていた時期がありました。このときは、年寄りの女祈禱師に頼みに行き——病気の女は女祈禱師か、祈禱師の妻か、未亡人のところへよく行きますし、病気の男は男の祈禱師のところですが——白人の医者に診てもらった方がいいか、を聞きました。「それがよい」というのがその答えでした。「この頃のことはどうなっているのか、ワシらにはよう、わからんからの」。白人が来てからというもの、みんなは自信を失ってしまったのですよ。昔は病気とか、流行病の原因は、きまりを守っていないから、と言いますか、もっとはっきりしてましたからね。

ともかく、鮭を欲しがって泣くのこの親戚は、最初の子の出産後に病気になったとき、また祈禱師のところへ行っています。このとき、祈禱師は性的な代償を要求しましたが、この女は断りました。ふつう、女は祈禱師の言うことは何であれ、拒みません。夫の方も受け入れるように希望します。老婆は、祈禱師の意志に逆らってはいけぬ、と言いますね。「それは気をつけなくちゃいけないことの一つだよ」と、ある老婆はわたしに言ったことがありました。それでも、鮭を欲しがって泣くの親類の女は断って、それ以来ずっと病気で、それ以来、他の女たちには冷たい眼で見られています。

この女の亭主もまた最近、落ち目で碌な目に会っていません。まずもって貧乏だし、アンヴィックでも、もうほとんど残っていないような地下の家に住んでいますが、犬はたった三匹いるだけで、それも弓形の骨犬と呼んでいるような痩せた犬ばかり、犬櫓のチームを借りることもできません。ちょっと前は、他人の隠し場から取り立ての魚（<sup>グリーン・フィッシュ</sup>罾から引き揚げたばかりの魚）

を盗んだ罪で訴えられました。「なぜ、盗んだ？」老人らが詰問しました。「食べるものがなければ、ワシらが分けてやることは知っておろうが」。実際その通りなのです。餓えた人は誰でも、食べ物が分け与えられるのです、その代わり、ときどき魚の罟とか、カンジキを作るときには手伝うように言われることはありますけどね。ここでは、物を盗むのはその人間がさもしい状態にあるとか、自分に誇りを失ったときだけです。この場合、この男は盗んだことを認めなかったので、長老たちは問い詰めました。

「どうして白状しないのだ。おまえがやったことはわかっておる。誰かが見ていたことがわからないのか？」というのです。つまり、若い衆はほとんどの時間をカッジムで過ごすのが習慣なのですが、狩りとか、よその部落へ行くこともありますから、帰って来れば、真っすぐカッジムに行って自分の見聞して来たこととか、みんなが知っているだれかの噂を冗談っぽく話したりするわけです。老人たちは若い者がどこにいて、何をしているか、じつによく知っていますよ。それに祈祷師もいますからね。ここではみんな、<sup>シヤーマン</sup>祈祷師というのは、人のやっていることを一部始終掴んでいると信じられています。祈祷師がこの村の族長であるのは、まったくこの理由からなのです。

部落のものが祈祷師のところへ行くのは、何も病気の治療とか、狩りや罟のための歌を買いに行くためだけじゃありません。祭や儀式、あるいは毎年の演劇では、そのどれにも名前が付けられていますが、祈祷師はそこで演じる人間以外の生き物（それを着ければ自分ではなくなる）の<sup>マスク</sup>仮面に息を吹き込まなくてはならないのです。また、その踊り手にも息を吹き込み力を与える必要があります。祈祷師が息を吹き込むまでは、精霊の仮面はそこのただの仮面に過ぎません。その上、鴨や鷺鳥の足や胸から取った羽毛がその仮面に括りつけられ、額からは羽毛の房をその端に結んだ鷺鳥の<sup>クイル</sup>大羽が一本垂れています。道化の仮面には息を吹き込みません。道化は踊り手に休息を与えるために合間に出てきます。たいていは若い男ですが、ときには奇抜な老人が演じることもありますね。わたしはある老人が——祈祷師でしたが——言った冗談を憶えています。この人、女の<sup>なり</sup>扮装をしてこんなことを言いました。「わたし半分は川上に、あとの半分は川下にいるのよ。どうやって会いに来て下さる<sup>22)</sup>？」

男は女の仮面を被ることがあります。ある役は女が演じてはいけないので、男が代わりに務めるのです。でも女が着ける女性用の仮面もあります。女は、カッジムでもハリモミの木柱に海獣の皮を張った直径4フィートの大きな太鼓に合わせて歌うことがあります。太鼓が五つあるので1マイル以上も離れたところでも聞こえますよ。カッジムでは百五十人もの人が同時に歌うことがあるかもしれませんが、でも、ハガーデルスレルという強力な踊りでは普通の女は

22) 原文は “How are you going to ‘fuss’ me?” fussには「女とデートする」と「騒がせる;やきもきさせる」の両方の意味がある。

歌いません。族長とか、祈祷師の妻だけです。仮面が出来上がると一年間カッジムに保管されて、誰れかが、その年の一年間、あるいは気に入れば——もしくは、その仮面が象徴するものをよく演ずれば——もっと長く、それを自分専用に着ることになるでしょう。祈祷師は仮面は作りません——とても忙しいからです。部落全体を幸福にする責任がありますし、何か突発的な事件——例えばですが、月蝕が起きたときに呼び出されます。ずいぶん前に一度、大飢饉が発生して、二冬にも及んだとき、月がこう、祈祷師に言ったそうです。「わたしが空から消えるときがあればいつだって、それを目にしてはいけない。わたしが役目を終えるまでは家のなかに入って煙穴も塞がねばならない」。そのとき以来、月蝕になると、祈祷師は伝令を出して叫ばしています。「月が空の下に沈んだ。家の中へ入れ！」彼自身はカッジムの屋根に上がって祈祷を行い、月が教えた通りのことをするのです。月がふたたび出てくれば、中で全員静かに座っている——踊っていればただちに中止したでしょう——カッジムに入ります。翌朝、全員が一列に並び、祈祷師が先導します。ちょうど弧を描くように村全体を一周するのですが、川から始め、川に終わります。前にも言いましたが、上流にある森の中に半マイル入り、下流の森にも半マイル入るのです。誰もが魚の束を背負って太鼓を叩き、歌い、決められた通りの動作を行います。

ほかにも祈祷師が責任を負ったり、部落民のなすべきことを指図することはたくさんあります。わたしは、ある家の中で床の真ん中に出てきた蛙がきちんと処理されたときのことを憶えています。この家は地面が凍りついたあと、秋に建てられたものでしたが、冬の真っ最中のある暖かい日に、穴が溶けて蛙が床の上に出てきたわけです。これはオスラングなので直ちに正常な状態に戻さなければなりません。祈祷師は問題を解決した代償として謝礼を受け取るのです。

<sup>マスキラット</sup>  
麝香ネズミも春、氷が緩み始めると池や湖の土手の穴から出てきます。もし、麝香ネズミがこの前、二月、三月に出てきたら、これもオスラングになりますから、正さなければなりません。

ときどき鯨がユーコン河に迷い込んで上ってきますが、そんなときにこの鯨を殺さなければ大飢饉になるでしょう。あるとき、テナナまで900マイルも上ってきたことがありました。大変な警鐘が鳴らされて、祈祷師の一人、中程度の力の祈祷師（能力によって高、中、低の三段階の祈祷師がいます。しかし今日では、昔のように何でもできる、とてつもない、偉大な<sup>シャーマン</sup>祈祷師はいません。今は、誰かがこれができれば、ほかのものはあれができるといった程度です）、テナナの祈祷師が単身出ていき、このはぐれ鯨を槍で止めました。零下40度から50度の中で、しかも腰から上は裸ですよ、この凍傷<sup>ストレス</sup>と大変な疲労とでそれから二、三日して死んでしまいましたが。村を救ってくれたこの祈祷師に人々は大変感謝して、潮吹き鯨に槍を投げ込む祈祷師の姿を<sup>スプリット・スプルー</sup>エゾマツ材の断面に彫り、これを墓標のそばに置きました。

カリブーと鹿がアンヴィックで減り始めたとき、みんなは大変に心配して、これは自分た

ちの行動に何か問題があったのではないかと、<sup>おそれ</sup>という虞から祈祷師に相談しに行きました。トランスから醒めると、この祈祷師は昔、偉大なカリブーのハンターだった、別の祈祷師を祀る<sup>グレイヴ・ビルディングリッジ・ボール</sup>霊廟の棟木に七頭の鹿を描くように命じたのです。それぞれの鹿は一年間に殺す鹿を表すというわけですよ。随分と昔には、オスラングを回避するために、祈祷師が人間をどこかの山の斜面から突き落とすように命令したこともありましたがね。

人が死ぬたびに祈祷師は<sup>デス・ストローク</sup>死人撃ち、つまり、死者の魂を送るときになると——普通の人は四日目、地位のある人はもっと遅く——死体の胸を叩かなくてはなりません。これは川の下を通って死者の<sup>スピリット</sup>靈魂の住む村へ赴く旅——ケサガイエ——そこでは時折、死者が体を温め、調理もできるように火の柱が昇っていますが、へと送り出すためです。この<sup>デス・ストローク</sup>死人撃ちによって祈祷師は村の周囲にいる悪霊をも追い出すのですよ。

先に出産のときに死んだ<sup>キョウダイ</sup>鮭を欲しがって泣くの従姉のことをお話ししましたね。このとき生まれた赤子はまだ生きていましたが、女の児ではあるし、この家族は普通の人たちだったので——この死んだ女性はお話した病人の<sup>グレイヴ・ボックス</sup>姉妹でした——この子は母親の胸に抱かれたまま一緒に<sup>グレイヴ・ボックス</sup>棺に入れられました。多くの歌を持ち、霊力も強く、狩の能力もある有力な家族ならば、こうした状況では、とくに男児であれば救えたかもしれませんし、家族の女性が養子にすることもあります。しかし普通の家の女の児の場合まず、生かしてはもらえないでしょう。ミッションの人たちが、助けようとした女の赤ん坊のことを憶えています。この子は連れて行かれ最善の介護を受けましたが、四ヶ月後に死にました。

子供が這い這いしている時期に死んだら、動物に食べられないように樹皮に包まれ、森の中の、エゾマツの木の下に置かれます。その木が生きている限り、死んだ子の魂もまた、それに護られて生きているのですよ。靈魂は木とともに死にます。ここで言いたいことは、我々は、薪や藪木を取るときは、森の中のどこであっても、そこにある全部を切ったりはしないということです。わたしたちは木や樹皮に頼って生きています。もしそれらを破壊してしまえば、宿なしになるしかありませんので。

<sup>グレイヴ・ボックス</sup>鮭を欲しがって泣くの兄の場合は溺死でした。白人の商人と一緒に飲んで、そのあと船で出かけ、ボートは転覆、インディアンだけが溺れたのです。母親は知らせを聞くと、家から飛び出て心臓が張り裂けるように泣き叫び、髪をかきむしり、腰のところまで衣服を引き裂きました。「息子よ、なぜわたしを置いて逝ったの？」死者の行く西を向き喚くのです。その声は1マイル離れたところでも聞こえましたし、この母親が<sup>ウエイリング・ソング</sup>詠う弔いの歌によって死んだ人の家族がわかったのです。地位のある家族は自分たちの歌をいくつか持っています。この母親の父は優れた獵師だったのでクズリとか熊の歌を持っていました。母親自身、始終村人から相談されて、自分の力も自覚しているので、誰も彼女を制止できるものはなく、あとでとやかく言うものもいません。だから、着物を腰まで引き裂いたのですよ——普通の人いろいろな言われるの

が怖いのでそこまで裸にはなれません——それから酷寒の氷の川に飛び込みました。息子と一緒に行きかけたのですよ、残されたたった一人の息子でしたからね。しかし引き戻されました。一緒に身を投げた父親も引き留められました。

二、三時間後に、遺体は発見されて近くにあった一番古いか、一番傷んだカヌーに乗せて家に運ばれました。溺死した人間の霊はまだ水の中にいると考えられているため、誰も川に入るのを許されませんでした。オスラングチャンネルに当たるからです。その水路は一年間、使うのを禁じられますし、女の人も、子カマスが豊富に獲れる場所があるのに網を仕掛けに行くことができません。この場所に潜む悪霊によって舟から水中に引きずり込まれるかもしれないです。わたしは、この川の別な場所ですが、こちらが敬意を示さなければ、安全が保障されない砂礫の断崖のあるところを知っています。

いつものように、会葬者は死者のために新しい衣装、新しいミットン、新しいモカシン、新しい帽子を作りました。二日目の晩、みんなは踊り、古い歌を唱い、三日目の晩には新しい歌に合わせて踊りました。鮭ベア・ハンターを欲しがって泣くの兄は優れた熊狩りだったので、熊の生態を模写し、熊の増加を促す熊踊りを踊ったのです。もしアザラシ狩りとか他の動物の狩りの名人であれば、同じようにアザラシか、その別の動物の踊りを踊っていたでしょうね。それに、豊猟、つまり狩の当たり年に死んだのなら、棺桶にはその獲物の姿を彫ったかもしれません。わたしが憶えているのは、ある人の好い狩人のことですが、この人は鹿の豊富な年に死んだので、棺桶に数匹の鹿を彫ってもらいました——鹿の豊年が続くようにです。

服喪期間の作業や、踊り、お斎ときは、死者に何をしているかを見せ、またその一部始終がのみこめるように死体を置きます。死体は座位を取るか、今はそんなこともあります、仮に横臥の姿勢であっても、体を支えられています。死んだ人は死者の村で、どんなふうに分の好きな食べ物が近くに置かれたか、大事にされたかを報告しなければなりませんからね。よその村から親戚が到着したあと、死人撃ちが終わったあと——この場合白人は、祈りのための在席を許されません、すべてが昔の通りに行われますから——六日目、死体は座位を取って棺桶に安置されます、眼を開けてそのままにしっかりと固定し、両手を死者が興味を示しているのがわかるような形に置きます。死んだ人はときどきは棺桶に戻り、特に夏ですが、そして何が行われているかを見たいと考えられているのですよ。この理由で、動物の腱で結わえられた棺桶は川を見下ろす丘の斜面に置かれて、誰が通り過ぎるか、村では何が行われているかがわかるように、それからまた、食べ物も近くにあるように、つまりは川の魚のことですよ、顔を川の方へ向けます。木の葉も落ちてしまい、秋も深まってくると、年配の女たちは、最も大事な食料、つまり鮭を細かく切りますが、白人が来てからはこれはビスケットに代わりましたがね、死者が食べれるように、また施主を祝福してくれるように棺桶のそばに置くのです。同時に老婆に限らず、男どももまた、墓地(タダトンテ、死体が硬直するところ、と言います)を整頓して、

雑草を引き、用具を元通りに直したりするのですよ。こうしている間も、みんなは絶えず、北の方に向かって息を吐き出しているでしょうね。春が近くなると、こうした故人にたいする配慮がまた繰り返されるのですが、こんどはよほど小規模です。

死んでも食べ物は棺桶の遺体の頭の近くに置かれるのですが、**鮭を欲しがって泣く**の兄の場合、故人の弓矢をお棺と垂直に立てた棒に支えられる横木に括りつけられましたね、でもこの人は祈祷師でも、族長でもなかったので、棺桶の上に屋根もなければ装飾も施されませんでした。遺品は親族の間で分けられましたが、特に愛用のライフル銃は、射撃の腕と歌に秀でた、家族の一員に与えられました。形見分けが終わって、この人の住んでいた家に火がかけられましたが、これは悪霊を追い出すためです。

**鮭を欲しがって泣く**の兄は、今の**アンヴィック**のたいていの男のように一人しか妻はいませんでした——以前は養っていける限りの、大概是二人ですが時として三人、妻を持っていました。それに、この女性はまた、女が顎に入れ墨すじの線条を入れる時期である**中年**——彼女ら自身が、あるいは主人が持っている歌によって刺青をしました。祈祷師の妻は族長の妻よりも多くの線をいれましたが——にもなっていなかったのですが、それでも再婚はしまいと心に決めて髪も切ってしまったのです。こんなふうこの人は、自分を知らないよその村の男にも、まだ喪に服していること、また主人の力パワーがなければ、誰とも交際しないということを示しました。主人が持っていた力を引き伸ばして、彼が残した雰囲気によって別な男のところへ行くことを防ぎたいと思ったのですよ。この主人の雰囲気とか、歌がある限り、自分は強いし、自活でき、ほとんどどんなことでもやり遂げるように自らを鼓舞したわけですね。

ときどき、死ぬ前の人が、自分の力を伝えたいと思う人と呼んでもらうことがあります。そのとき、瀕死の人は北を向いてその人に息を吹きかけ、唾を吐きます（唾は自分の一部ですからね）。あるとき、**鮭を欲しがって泣く**がわたしにこう言ったことがありました。「あなたのことはとっても気にかけているのよ。あなたのためなら、たいていのことをしてあげたいし、わたしのパワーの一部をあげたいけど、そうすれば、わたしは一年以内に死んでしまうでしょうね。子供たちのためにもわたしは生きていなければいけないので——善霊がわたしを生かしておいた方がよいと考えるならばね」。**鮭を欲しがって泣く**はわたしにこんなふうに言いましたが、それはしばらく前に、彼女が何か言ったことをわたしが理解できず、彼女を傷つけたことがあったからです。そこにいた、ある老人が「あれにあんまり多くを期待してはダメだ（ミッション・ボーイだからな）」。そこで、**鮭を欲しがって泣く**はこう言いました。「あなたには白人の学問はあっても、知性は全然ないのよ。子供たちを育てる仕事が終わったら、もっとたくさん、教えてあげる」。

ウイドウズ  
寡婦の多くは髪を切るわけではありません、しかしそれでも、まったく思慮のないものは別として、一年未満ではけっして再婚しませんし、二、三年は待つでしょう。女は待つこと



で評価されるだけでなく、夫が死ぬ前、無力なときの介護の仕方によっても値ぶみされるからです。もし、こうした状況で粗末に扱われたら男の感情は大いに傷つくでしょうし。夫と妻が同時に死んだら、ほら、毒性の木の実，“悪魔の実”と呼んでいます、を食べたときとかです、二人は一緒にお棺に入れて埋葬されます。わたしは、このような棺桶を移動させなければならず困ったことがありました。ミッションがその土地を何かに利用したかったのです。棺を結んだビーズの紐が外れて落ちました。今、われわれが使うような種類のものじゃありません、大変古いもので、シベリアとの交易で手に入れたものだと思います。村の人たちはそのビーズを要求しましたが、わたしが手放さなかったので、引き上げて行きましたよ。みんな随分、欲しがっていましたね。

<sup>ザ・ディーズト</sup>亡くなった人は“わたしたちの元から行ってしまった人”と言われます。“死”という語は動物の場合だけに使われます。一度わたしが、ある人を死んだ人といったことがありました。「何と！その人は犬ではないぞ、人間を指してそんなことを言うとはな！」と言われましたよ。それから、死んだ人の名前は決して口にしません、心の中では思っていて、その人のことを思うときはいつでも、北の方を向いて息を出します（リード<sup>23</sup>はわたしに長く、ゆっくりと息を吐き出して見せた）。だから、狩の帰りに墓地を通りかかったときは、木の実を摘んで半分は食べますが、残りは墓地の方へとか、豊猟のシーズンの今、臨終の状態にある族長の方へ向って投げ、北を向いて息を出すのです。

わたしは母の妹が住んでいる上流のシャグルックを訪問したことを憶えています。お祖母さん<sup>ぼあ</sup>！」と呼びましたら「わたしをそんな呼び方をするのは誰の子かい？」わたしが誰かわかると、泣き出して、北の方を向き——私の母の名を呼んでいました。「姉さん、姉さん！<sup>マイ・ブラッド</sup>わたしの甥が会いに来てくれたよ！」ここでは仮に死んだ人に対して何か不敬なことを言うと、死体そのものを笑ったことになると考えられています（人々は死者を思うことにおいて、彼らを待つ“死”という体験を正しく理解するのです）。

クリスマスの時期には三、四日間死んだ人たちのため儀礼が行われます。この一年間で家族を亡くした人が祈祷師にお斎の大部分を寄付するように呼びかけられるのです。「鮭を何束でもいい、寄付してくれるのは誰だ？ アザラシ脂何袋でもいい、アザラシの皮、トナカイの皮、臄（裁縫のため）、白鯨の食道（装飾用）を寄付してくれるのは誰だ？」と祈祷師は要求します。みんなは満足するまで食べるのです。ときには死んだ人のために食べることもあって、森や川で獲れる一番いい食べ物を取って置くことがあります。<sup>ミッショナリー</sup>伝道師会では、これは単なる社交のための宴会だと聞いていますが、アンヴィックでは古い儀式のすべてが廃止されたわけではありません。儀式というものは、型通りに行われないと、やらない方がマシだと思われています。

---

23) 文末にあるように、本編の「語り手」であり、資料提供者のT. B. Reedのこと。

しかし、儀式なしでもやっていけるというのでは、というのはこの人たちの希望に大いに反するものです。“宴会”——とミッションナリーの中ではわたしも、そう言っているのですが——はみんなの唯一の楽しみなので、シャグルックのような保守的な村でやっているように、ここでも続けていきたいと願っているのです。

T.B.リード／エルシー・クルーズ・パーソンズ

## 参考文献

### 1. 和文のもの

アードス, R./オルティス, アルフォンソ編『アメリカ先住民の神話伝説』上下, 松浦俊輔  
他 訳, 青土社, 1997年

### 2. 英文のもの

Erdoes, Richard/Ortiz, Alfonso ed. *American Indian, Myths and Legends*, Pantheon  
Fairy Tale & Folktale Library, Pantheon Books, New York, 1984

## IX エスキモー<sup>24)</sup>の冬

女たちの漕ぐ櫓<sup>オール</sup>の力によって毛皮輸送船は浜辺に近付いていた。海面に点々と浮かぶ流氷を用心深くかわしながらその合間を縫うように進んでいく、この船の船尾<sup>とも</sup>には、カリブーの毛皮を詰めた袋が山のように積み上げられていた。船の持ち主、パカックが腰を下ろしていたのは、その毛皮の上だった。重い荷物を満載しているし、潮の流れも速かったので一本の櫓に二人の女がついて懸命に船は前進した。パカックの息子の乗るカヤックがこの船に並走していた。彼は一行の食糧を確保するために、アザラシ漁を続けていたのだ。一本の櫓の真ん中を握って右に左にと、交互に水中を押し分けながら、彼の操るカヤックは、海面を素早くジグザグに進ん

---

24) Eskimosとはアルゴンキン語の ‘Esguimantsik’ (‘生肉を食べるもの’ ‘eaters of raw flesh’) に由来する名前、アルゴンキン族が「火を使用しない」北方のインディアンに付けた名。しかしこれらの先住民は自らを *Inuit* (イヌイト「人間」) と呼んでいるため、これが正式な呼称となった。「その生活圏はベーリング海からラブラドル、グリーンランドまでの全北極海沿岸を占める。シベリアの最東端の岬にも孤立した数個のイヌイトの村がある。生活文化は、概して統一されているにも拘わらず、マッケンジー川の西部に住むイヌイトと、東方のグループには明らかな相違がある。グリーンランドのイヌイトはヨーロッパ人との接触によってかなり変化している。本篇に登場するグループは、ハドソン海峡から北へ延びる大きなバッフィン島、およびデイヴィス海峡とバッフィン湾の西岸部を占めるイヌイトであるが、殊にこのバッフィン島の東岸の人々を対象にしている。この地域の人口は四百を越えない。これらの村落の人たちは広範囲の移動をし、ハドソン湾の北岸や、ハドソン湾北西の大陸部の原住民と接触するが、知己の間(イヌイトの諸部族同士)の交流に限られている」(原著: Appendixより)。

で行った。狭いデッキの上にはアザラシの屍体が何頭か、縄で束ねられ転がっていた。

真っ先に岸に着いたのはこの若者だった。彼はボートを斜めにして浜辺に着け、座っていた真ん中の小さなハッチから這い降りた。銚ややす、それに留め輪から浮きはずして下ろし、それから縄を解いてアザラシを浜にドサッと投げた。すべてを下ろしてしまうと、水中からこの軽いボートを抱え上げて逆さまにし、頭の上に載せて砂浜の上を運んで行った。

さて、そうこうするうちに大きな船の人たちも陸にたどり着いた。渚はまだ満潮なので大人はデッキから砂浜まで一気に飛び降りたが、年寄りと子供たちは船縁から伝うように外に降りた。テントの覆い、柱、家財道具が下ろされ、夏の間、内陸部での狩りで手に入れたカリブーの毛皮が乾いた砂の上に置かれた。女たちが樹木の見えない丘の上に登って薪を探している間に、男らは、船を引き揚げてテントを組み上げるのである。骨組はすぐに来上り、毛皮の覆いがある上に放り投げられた。下まで届いた覆いの裾の数箇所に石を乗せて固定する。女たちが戻って来てテントの後ろに、集めた藪や低木類を投げ下ろし、分厚いカリブーの毛皮で覆った。こうしてこの一家の寝床の準備はすっかり整った。アザラシはテントの出入り口の両側に積み上げられたのだった。

しばらくしてパカックの兄弟の船がいくつか戻ってきた。そろって朝のうちに出掛けたのだが、流氷の間のわずかな水域を掻き分けて到達した範囲はまちまちだった。船から荷を降ろして彼らもまたテントを立てた。

女たちが何人か、近くで薪を積み上げる。パカックは持ってきたマッチを擦って火を点けたが、つきが悪くくすぶっているのをうちわで扇ぐとやると炎が上がる。火が熾ると、すぐに灌木に燃え移った。この間、猟師がアザラシの頭を切り開いて脂肪の付いている皮を取り除いているのだ。彼はこの脂肪分を何切れかに分けて炎の上に投げた。柔らかい石鱈石ソープ・ストーンの塊をくり抜いた長方形の葉罐に水を一杯に入れて火の上にかける。アザラシの肉を中に入れると、まもなく、水は沸騰し始める。肉が茹で上がったところに男も女も一仕事終わる。パカックは葉罐のそばに立ち上がって大声を上げる。「肉だ、肉が茹で上がったぞ！」男たちが火の近くに車座になると、女たちもまた、別の環を作る。パカックが葉罐の中から肉の一切れを取り出して男たちの一人に手渡す。その最初の男が歯を当て一口分を噛みとって隣のものに回すと、同じように一口だけ噛み切って次に回す。こうして全員に肉が行き渡った。

狩猟から帰ったものは疲れきっており、一家が寝るテントの奥に作った寝床に引き上げた。

頭を出入り口の方に向けて、テントの端から端まで届くような大きな寝床の上に拵げたカリブーの毛皮を引っ被った。

パカック兄弟、それからウスク——同居している知恵遅れの独りものの老人——が、この冬の村に最初に到着した。それから二、三日していろんな場所で猟をしていた他の家族がやって来たのである。男も女も、夜遅くまで座って、それぞれが体験した夏の思い出や、狩りでの収

穫を語り合った。パカックとその兄弟は、通い慣れた、ある内陸部の湖岸辺りで狩り続けていた。そこでカリブーの大群に出会ったのだった。何人かでこの動物を水の中に追い込むと、別の数人が、ボートで追跡して簡単に追いつき、槍で突き殺してしまう。

パカックは五人兄弟の長男だが、全員がみな、狩の技術に長けて家族をよく養った。彼らは大胆なこと、また進取の精神でも著名だった。だから彼らと友好関係を結ぶことが求められ、敵対関係になることは恐れられていた。なかでも、パカックが最も恐れられていた。そのわけは、彼は腕力に秀で、ナイフ、槍、弓の技術にも優れているだけでなく、超能力を授かっているからだった。子供のころに、海の動物の漁を支配する月と<sup>ザ・グレイト・ディーアティ</sup>大神を訪れたことのある、あの老呪医<sup>シャーク</sup>、鯨の膝に腰かけたことがあったからだ。この呪医との接触を通じて、その超自然的な力がパカックの身体に入り込み、今や病気や飢饉が村を襲ったときにはいつでも、彼の祈祷が必要とされたのだった。このように、パカック兄弟は、庇護者として頼られると同時にまた、その異常な力ゆえに畏れられ遠ざけられてもいたのである。

パカックは自分の力を驕り、濫用することはなかったが、弟の一人、イケラッピングは短気で怒りっぽく、態度が横柄だったので恐れられ、また憎まれてもいた。もし兄弟が連帯しなかったら、冬季キャンプの村人たちは、このイケラッピングを始末することで合意したかもしれない。

遅れて到着したものの中に、<sup>ノー・タンク</sup>無言という男がいた。この男の一家は、夏の狩りが不首尾に終わっていた。氷の覆う高原の合間の狭い谷を狩猟場に使っていたのだが、不運なことにカリブーが別の餌場に向かってすでに去ったあとにやって来たのだった。家族全員の毛皮がほんの少しだけしか獲れなかった。自分だけでなく、老母のペトレル、妻のアッテナ、子供たちに必要な冬の衣服をほとんどと言っていいほど作れなかったのである。しかし彼はそれほど落胆はしていなかった。まだ幸運を期待していたし、余分の毛皮がありさえすれば、きっと分けてもらえる、と友人の好意を当てにしていたからだ。

隊伍を組んだ人々がこうして次々と到着すると、ほんの少し前には人気もなく、静かだったこの島は今や、一群の小屋が立ち並んで、大変賑やかになってきた。女たちは薪を集めたり、衣服の繕いをしたり、いろんな家事に忙しかったが、その間、男たちは、カヤックに乗って狩りに出掛け、夕食の獲物を持ち帰ってきた。アザラシの毛皮は女たちが<sup>こす</sup>擦り、地面に拵げて乾かしたあとで加工してテントの覆いを作り上げるのである。

風向きが陸から海へと変わっていた。そのため流水は岸から沖へと動いていた。寒さが襲ってきた。海面を薄い氷が覆い始めていた。海が凍る前に、夏の間あちこちの島に置いて来た犬を連れて帰る必要があるのだ。放置された犬は、砂浜で見つけたものや、山で狩りをして食いつないでいるだろう。夏の狩りには、ほんの何匹しか連れていくことができなかったのに、連れ帰った犬の中にはその間に生れた子犬も何匹か含まれており、今では女たちが十分に愛情を

注いでその面倒をみている。

新しい氷が海面に張り出せば、船ではもう遠くに漁に出掛けることはできない。鋭い氷の先端で船を守る毛皮の覆いが切り裂かれてしまうからだ。数日間はずべての活動が陸の上に限られる。猟に出掛けて雷鳥や野兎を持ち帰ったが、みんなは不安な気持ちで十分漁が出来るほど氷が厚くなる時期を見計らっているのである。新しい食糧が手に入らなければ、貯蔵庫はたちまち空っぽになってしまう。それに寒くなってきかとも、海が完全に結氷してからでないと、冬の着物を着て仕事を開始することはできない。そんな罪を犯せば、海の女神の激しい罰を招いてしまうだろう。

この年は気候がよくて、夏と冬のあいだの不安な期間が必要以上に長引かないのは幸いだった。三日間寒い日が続いたあと、もう男たちは厚い氷の上をその端までもどンドン歩いて行って、アザラシが呼吸のために、氷の合間の海面に浮上してくるのをじっと待っておればよかった。風のために流氷は押し流されて、海面に氷のない部分はそれほど広くなかった。したがってアザラシには簡単に近寄って鉞で突き刺しそのまま引き揚げることもできる。それに氷はそれほど急に出来るわけでもないでないので、カヤックで乗り出すことも可能だった。こんなわけであつぱり肉を手に入れることが出来た。

この間、女たちはカリブーの毛皮を擦ったり整えたりして、家族が冬に身に着ける衣類——若いカリブーの皮からは暖かいシャツやズボン下、それに大きく厚い皮からは、分厚い上着やズボン、それにやはり若いカリブーの薄い毛皮で靴下を作り、擦ってザラザラになったアザラシの毛皮を靴底にしたブーツはカリブーの両脚の皮から取る——を拵えていたのである。

無言のところは、気の毒にやと家族全員に行き渡るだけで、余分の毛皮はわずかしかなかった。それにパカックの強運は例外として、キャンプ全体の収穫量も折悪しく少な目の方だった。これから先、男たちは毎朝家を出て、夕方には戻ってくる、規則正しい生活に入る——たいていは十分な獲物を持ち帰るのだが。

ある日のことだ。この日もまた、みんなで出掛け、それぞれが方々の氷原の端に分かれて、じっとアザラシの出で来るのを見守っていた。日中、空は曇り、海からの強い風が吹き始めた。風は勢いを増して危険の前触れとなる、あの不吉な氷のひび割れる音が聞こえた。慌ててみな橇に荷を載せ、陸地を目指して急いだ。足元で氷は割れ初め、風の圧力で表面に亀裂が入る。しかし、みんなはなんとか浮氷が崩れて海へと漂う前に陸地にたどり着いたのであった。

無言の橇だけが戻らなかった。彼は、岬のように突出した氷の上で猟をしていたのだった。それで危険に気づくまえに、もう氷は岬のところから崩れ落ちて急速に沖へと流れ出していた。こうなつては運命に従う以外に術はない。風がまもなく吹き疲れて鉞を収め、いま彼を運んでいる浮氷を逆に陸地へと押し戻す僥倖を心待ちにするだけだ。

幸いなことにたつた今、アザラシを殺したところだったので、皮を剥ぎ取つてその真新しい

毛皮で風避けの小屋を作った。檜はテントの柱に役立てなければならない。また、上に雪が積もるようにして毛皮の覆いを風から守ったし、アザラシの毛皮の下から脂肪層を取り、受け皿にして、こうして速成ながら小さなランプを作り上げた。さらに幸運が重なって火鑽と、さらに芯として使う少量の苔を持ってきていたので小屋の中で火を熾すことが出来たのだ。疾風はまだ続き、怒り狂う波は彼を乗せて漂う浮氷を今にも真っ二つに切り裂くかと思われた。夜が明けたとき、陸地は遠かった。しかしながら、間もなく風は鎮まって、早い潮の流れは浮氷を陸の方へだんだんと押し戻してきた。

とてつもない寒さになっていた。軟らかい氷の膜が海面を覆い始め、波は急速に静まってきた。夜のあいだは必至と思われた、浮氷が割れる恐れはもうなくなったし、溺死の危険は当面遠のいた。それでもまだ、漂流が終わるかどうかは疑わしかった。潮の流れが変わるとともに、再び海流の向きが変わって浮氷は陸から遠ざかった。潮の戯れは数日間続いた。岸は近くに見え、生還の望みは急に高まったかと思うと、次の瞬間、岸はまた、遠のくのだった。こうした不安な日々にあっても無言の勇猛心は決して挫けることなく、彼は自分自身の不運をもじって次のような歌を作った。

アヤー、僕は楽しい、こいつは愉快。

アヤー、僕の周囲は氷だけ、こいつは愉快。

アヤー、僕は楽しい、こいつは愉快。

僕の陸地は軟氷ばかり、こいつは愉快。

アヤー、僕は楽しい、こいつは愉快。

アヤー、ホントにいつになったら終わるんだろか、こいつは愉快。

寝ずの番には疲れたよ、こいつは愉快。

彼の辛抱と忍耐は結局むくわれた。一週間の不自由を耐え忍び、冬のキャンプ地から、さ程離れていない海岸に彼は流れ着いたのだ。それから数日かかって氷の海と岩山を越え、彼は家族と友人の待つ我が家に辿り着いた。行方不明になった彼を、みんなはもう諦めていたところだった。

\*

\*

\*

寒さが増してきたので、軽くて薄い夏のテントではもはや防寒の役には立たなくなった。女たちは新しくアザラシの毛皮でテントの覆いを縫いあげ、藪や低木類を掻き集めた。テントの外側にまず、これらの枯れ木類を並べて、それから新しい覆いを全体に被せた。開閉部のフラップ垂れ幕も、人が身を屈めて出入りするわずかな隙間だけを残してがっしりとした壁に変わった。

このため内部は暗くなった。前はテント・カバーの前部にアザラシの毛皮の内側の薄い、半透明な皮膜を利用していたので結構明るかったのだが。それでランプが所定の場所に置かれた。屋根型の覆いを被せたテントの細長い、長方形の出入り口付近はまだ、食糧置場として利用し、ベッドのまん前に石鹼石のランプ——つまり先細りの容器——が置かれたのだ。テントの持ち主の妻たるものは、ランプの前の床に座る——ちょうど跪くような格好で全体重を両方の踵で支えるのである。このランプは、嚙んで油が出やすくした鯨の脂肪を十分に含ませてあるし、手前の端に下からまっすぐ上に苔で作った芯を入れてあるので、骨製の針できちんと切れば、平らで黄色の炎が上がって小屋の中を心地よい温度に温めるのだ。

やがて雪が降り始めると、秋の疾風が大地の穴という穴をすっぽりと雪で埋め尽くした。テント小屋の周囲にも降り積もった。ヒースのような低木類は深い雪の下に隠れてしまったので、家事労働はもっぱら、屋内に限られるようになった。石鹼石の鍋・釜をランプの上に置き、料理はすべて室内で用意されるのだ。小屋の出入り口も雪を固めて低い通路を作り、寒さ避けに利用する。さらに一段と寒さが募り、堆く雪が積もってくると、テントから「氷の家」<sup>スノウ・ハウジズ</sup><sup>25)</sup>に移り住む人が大部分だ。男たちは縦約30インチ、横6インチ、高さ18インチの氷の塊<sup>ブロック</sup>を裁り出して、まず、外枠としてこれらを円形に並べるのである。

この第一段目のブロックの上端を地面に切り落とし、続いて右側も同様に切り落として上側になるほど細くなるよう緩やかな傾斜をもたせる…。二段目のブロックは切り落としたその上に、少し内側に押し込むようにして載せて丸みを持たせる。ブロックの継ぎ目や穴のあいたところには軟雪を詰め込む。外側の一人が雪のブロックを裁ると、中にいる相棒がこれを受け取り、そのブロックを内部から置いていく。各段は下の段よりさらに内側に積むように並べていくと、次第に紡錘型の氷壁が出来上がる。最後に大きな基本塊が差し込まれると、中にいるものはそれを切って自分が出入りする小さなドアを作るのである。この円形の部屋の後ろ半分にはやはり氷で2、3フィートの段がベッドとして作られる。またドアの左右には一つずつ、これと同じ高さ<sup>バンク</sup>に貯蔵庫<sup>26)</sup>が建てられる。ベッドの段には低木類や毛皮類が敷き詰められる。夏用のテント・カバーはこの「氷の家」の内部を覆うために使われるが、これは杭やロープを壁に括りつけて固定し、居間の熱気で氷が解けないように保護するのである。ベッドの前部の両側には、それぞれ一つランプが据えられて、その上に鍋が掛けられる。ドアの真上には窓が一つ切り取られ、アザラシの腸を縫い合わせて作った半透明の布で覆われる。さらにドアの前

25) snow houses. エスキモー (イヌイット) 語ではイグルー (igloo) と呼んでいる。この「氷の家」の作り方の方法、手順については、裁り出した氷のブロックをドーム型 (紡錘型) になるように切り揃え、積み上げていくことを除けば、一定の様式はないようである。

26) ポーチとして、貯蔵庫代わりの棚、犬小屋にも使われる (岡162-3)。

には、一続きの天井屋根の低い建物<sup>27)</sup>が建てられて、家の内部を風から守る通路として用いられるのである。

すべてが整ったところで全員は「氷の家」に移った。二家族で一つの家を共有し、それぞれの主婦はランプの前の席を占める。余分のアザラシの肉はドアの両脇の<sup>プラットフォーム</sup>「棚」に貯蔵する。こうしていよいよ本格的な冬の生活が始まったのだ。皮膚を刺すような寒さである。犬たちは「氷の家」の入口の通路辺りに肩を寄せ合うように蹲っている。

早朝、男たちは家を出て橇のところまで行った。鯨の骨を割り磨きたてて作った<sup>ランナーズ</sup>滑走面のシューイング<sup>28)</sup>は薄く氷の膜を被っている。猟師の一人が、口に水を含んでこれに吹きかけると、水はゆっくりと滑走面に流れた。それから<sup>ミット・ウツンド</sup>二股の手袋をはめた片手でそれを磨く。氷が十分に滑らかなになったところで、橇を起こして横向きにする。鋸を紐で括りつけ、ナイフは橇の後部をなすカリブーの角—それは厚い氷原の中で舵取りの際に使われるものだが—に吊るす。この猟師はそれから犬たちを<sup>ハーネス</sup>曳き具につけるのだ。こうして<sup>ライト・ティーム</sup>軽装の連畜は浜辺にむかって走り始めた。長い冬がつづくあいだ潮の干満によって砂浜は断続的に厚い氷の塊によって覆われてしまうが、冬が深まるにつれてこの氷塊は、いよいよ厚さを増していく。この切れ切れの氷塊の中を橇が行き交って、やがて踏み固められて滑らかな浮氷までの道が出来上がるのである。橇は猛烈な速さで滑り、やがて猟師たちはアザラシの猟場に出た。ここでまず嫌がる犬を宥めすかしてなんとか前進させなければならない。これは声を張り上げ、さらに鞭を振るって彼らを励ますのである。こんな風にやる気のない犬に対して馭者は、怒鳴り、同時に巧みに正確に鞭を当てて懐柔していく。犬たちも次第に気分が乗ってくると、ツルツルした浮氷の上を素早く走るようになる。強風によって割れて幾つかに分かれた氷原の一部、また、逆に幾つかの破片が突風に煽られ一つに集まってそのまま凍結して出来た流水のところに到着すると、馭者は鋭い氷の刃先や砕けた氷塊の上に橇を乗り上げなければならない。前進は遅々として困難を極めるものだ。

ともかくも猟場にたどり着くと、犬たちは早速アザラシが呼吸する穴を嗅ぎ始め、馭者が制しきれないほどスピードを上げて勢い込んだ。穴から多少距離を置いたところで、なんとか彼らをとどめることが出来た。犬が飛び出さないように<sup>ハンモック</sup>氷丘に曳き具を縛り付けて、その穴を調べる。今でもまだアザラシが出入りしているかはわからない。完全に雪で覆われているため、熟練した眼でないと見極めはむづかしい。猟師は雪の塊を積み上げてその上に腰を下ろした。用心深く鋸を横に置いて待った。何時間もそこに座ってアザラシが鼻を鳴らすのを待っている

27) 我国の新潟県上越市に見られるような、町家の軒から庇を広く張り出してその下を通路とした雁木造にも相当しようか。

28) shoeing. 滑りやすくするため橇の本体に付けた滑走部。



のである。ちょっとでも音をたてると、警戒心の強いこの動物は脅えて逃げてしまう。だから凍てつくような寒気の中でも彼は身動き一つしない。ついにアザラシが音を出した。慎重に鉤を構えて、それから垂直に雪の中に突き立てた。狙いは正確だった。アザラシは逃げようとしてあがいたが、無駄だった。猟師は穴から雪を掻き出して獲物を氷の上に放り出すと、それから素早い一撃を頭にくれてし止めた。橇に積み込む前にナイフで切り捌いて肝臓を取り出すと、昼飯に食べた。

そうこうしているあいだに、短い日はもう暮れてしまった！ 犬を橇に繋ぎ、猟師はみな家路についた。戻ってくると橇から荷を下ろし犬を曳き具から離し、分厚い外出着を脱いだ。この家の猟師は、自分の吐く息によって出来たコートの水を丹念に叩き落として、貯蔵室の棚においてそれから中に入った。すぐにアザラシの毛皮製の靴や、脚を寒さから守る鳥の羽毛で擦えたストッキングを脱ぐと彼の妻がランプの上の棚にかざして乾かした。彼女はそれから次の日も履けるように破れ目を繕うのである。

猟師たちの全員が戻ってくると、収穫のないものは、その日一番の身入りの多い猟師の家に集まって肉の一部を分けてもらい、そこで食べるか、あるいは家で待っている家族のために持ち帰るかする。みんなはその日の出来事について夜遅くまで語り合うのである。

\* \* \*

さして変わったこともなく、静かで平穏な生活が続いていた。そんな矢先に、無言の末の息子が病気に罹った。子供は水も食べ物も受けつけなくなった。家で何を試みても効き目がなかった。愛する息子の命を心配するあまり、アッティナはパカックのところへ行って、何が息子を苦しめているのか、助かる方法はないかを聞いた。パカックは無言の小屋にやって来た。中に入るとすぐ、ランプの燈心を下げさせて、後ろの壁に面したベッドに座って祈祷を始めた。自分の守護霊に助けを求めて祈願するとき、彼の体は激しく震えた。何か意味不明のことをあるいは呻き、あるいは叫んだ。

とうとう、祈祷が終わった。彼はアッティナに向かって話しかけた。「あんたは何か過ちを犯したろう？ 禁じられている食べ物を喰ったり、やってはいけないことをしたりしなかったかね？ いったい、どんな禁制<sup>タブース</sup>を犯したんだね？」 母親は自分の子供に病をもたらした原因について一心不乱になってあれこれと自問自答しているうちに、あることを憶い出した。先日、家の窓に出来た霜を擦り取ったこと、また同じ日にアザラシの肉とカリブーの肉を食べたことがあった。

そこで直ちに告白した。「申し上げます。うちの窓から霜を取りました。カリブーとアザラシの肉を同じ日に食べてしまいました。わたしは罪を犯しました。」パカックは答えた。「よい、よい、お母さん、あんたは罪を認めた。これで犯した罪の祟りは許される。いままであんたの身体の周りに見えていた黒い暈が、ほれ、それがこの子に取り憑<sup>つ</sup>いていたんじゃが、もう消え

たから大丈夫。子供はすぐよくなるよ。」

ランプに再び灯は点った。アッティナの罪の告白によって超自然の力は弱められた。両親はこうして子供の快復を心待ちにした。

しばらくのあいだは、この子は良くなったかに見えた。しかし、突然強いぶり返しが来て、パカックを呼んで治療を受ける間もなく、死んでしまった。直ちに無言は埋葬に取りかかった。自分の鼻の孔にカリブーの毛を填めて死臭を吸いこみ汚染されるのを防いだ。両足を紐で縛り、無言は死んだ子の死体を抱えて小屋を出て、丘に登った。そこで紐を切り、こうして子供の魂を解き放ったのだ。無言は石の天蓋の下に亡骸を安置したが、その重みで身体が潰されないように十分配慮した。それから生前にこの子が愛用した玩具を置いて家に帰った。三日間、家族全員は家に留まり、喪に服した。無言は狩猟に出なかった。アッティナもベッドからカリブーの毛皮を動かさなかったし、繕いものもしなかった。これらの禁忌を破れば、また新たな災いを招くことになるからだ。

四日が過ぎると、家族のみんなは死者の息によって汚染した衣類を脱ぎ捨てた。全員の衣服を作るには隣り近所の人々からでも分けてもらってなんとでも十分な毛皮を手に入れなければならない。こうして友人の慈悲を受けてこの家族はなんとか新しい衣類を準備できたのだ。

孫の死と、それから一家のものに対する気兼ねが、無言の母親ペトレルのところに大きく重くのしかかってきた。息子自身は楽天的な性格で、子供はまた出来るだろうと気楽に考え自らを慰めていた。しかし母親の方はもう老い先も短く、これから何年もの歳月の重みには堪えられないとの思いを強くした。息子や孫たちを愛していたが、自分は家の中で死ぬかもしれないという恐れに取り憑かれていた。そうすればみんなはまた冬着を捨てなければならず、そうして十分な防寒もできないままに過酷な冬に裸を晒さなければならない、というのだ。ただ自分が外で死ぬことさえできれば。そうすれば愛する人々にもう一度、病気と死という苦しみを与えずに済むだろう。こんな考えが老婆のところに寄り憑いて離れなかった。そしてとうとう自決の決心を固めたのだ。

長い北極の夜が始まっていた。太陽は真昼ごろ、ようよう地平線の近くに顔を覗かせた。その微かな光を氷や山の上に広げたに過ぎなかった。ある晩のこと、猛烈な寒気と雪の中、強風に鞭打たれながら、老いたるペトレルは家を出て氷原を渡り、とある小さな島までやって来た。その荒涼たる岩山の隅っこに石の壁を積み上げ、老婆はその背後に座った。凍死するのも覚悟の上だった。子供たちのことが頭に浮かんで来た。だが自分はベッドの上で病死するのではないことに満足していた。もしそうなれば来世、つまり冥土での自分の生活は苦痛と拷問に満ち満ちたものになるだろうから。なぜなら、そこには欠乏と飢餓があるだけで、おまけに一年中寒さと諍いが支配しているのだから。自分の死に方を選ぶことによって、老婆は天上界での

幸福な暮らしを夢見ていた。そこで自分は毬遊びをしよう、北極光が溢れる中でわたしの楽しい動きを友たちが見守ってくれるだろう。この世の安楽と豊かさ、愛情をそのまま享受できるだろう。その上、冥界の苦しみは免除されるのだから。両脚が寒さで麻痺してきて眠気が襲って来た。楽しい未来の夢でこころを一杯にしなから。

夜通しアッティナはランプの火の世話のために目をさましていた。たまたま周囲を見回すと、ペトレルの姿が見えないことに気がついた。夫にそれを告げると、すぐにピンと来た。警報を出して間もなく、総がかりで橇による救出に当たった。降り続く雪の上には何の足跡も見当たらない。一行は別々の方向に分かれて老婆の行方を追った。海岸に沿ってありとあらゆる方向に橇を走らせた。パカックのところを下働きをしている独身者のウスクもこの救出隊に加わっていた。

人から蔑まれ笑われているこの男が、老婆を発見し、凍死寸前の彼女を救ったのだった。抵抗はされたが、ウスクは老婆を自分の橇まで抱え込むと、急いで家に戻った。ペトレルは自分の家に運び込まれ暖かい毛布にくるまれたが、家族や隣人たちに対していらぬ配慮をし、かえって心配をかけてしまったことを叱られた。救われたことは不服であったが、このあまり物に拘らない息子の善意の忠告は甘んじて受けたのだった。

この事件をもって無言の不運も種が尽きたようで、このあとは何事もなく冬は終わった。天候は好転し、強風続きで猟師が不猟をかこつようなこともなくなった。雪は固くてバサバサしてきたから狩猟場には難なく行ける。二月の初旬、初めて日光が高山を照らした。風はまだ強かったが、陽が射し始めたおかげで、狩猟も労働もずいぶん楽になった。

ときどき遠くの集落の数人が親戚に会いにやってきた。いろんな各地の情報やニュースを求めてみんなは客人が来た家に集まった。狩りでの収穫とか、結婚や出産、病気とか亡くなった人のことなど、話しは尽きないほどだ。何か月もこの村が外界とあらゆる接触を断たれていたのは、岬という岬の足場を洗い流してしまうほどの強い潮の流れで氷が張りにくかったからだ。寒気がしばらく続いて海が絶えず浮氷で覆われて初めて、村人は方々へ移動できるようになったのである。

ある日、かなりの数の旅人の姿が見えて来たが、その橇も犬も足取りもこれまで見かけたこともないものだった。この知らせはたちまち村中を駆け巡って、女も子供も見晴らしの良い地点に集まり、いったい誰がやってくるのか、見極めようとしてじっと目を凝らすのであった。やがてパカックが、一行の中に何日かの旅を要するほど離れたところに暮らしている、ある旧友の姿を認めた。「ケワタ鴨（アイダーダック<sup>29)</sup>）だ。ケワタ鴨がいるぞ！」旅人がパカックの友だちとわかったと、女たちはどっと声を上げて笑いさざめくや、手を振り跳ね回って歓迎の

---

29) Eiderduck.

意を表すのだった。脅えていた子供たちは母親の陰に隠れて泣いていた。男たちのほとんどが氷原に降りた。客人を出迎え、橇から荷を下ろすのを手伝うためだ。パカックはケワタ鴨とその連れを案内して、とある「氷の家」に招き、冷凍のアザラシの肉でねんごろにもてなしたのである。

食事のあいだに人々がこの家に集まってきた。みんなベッドの段に腰かけたり、床の上に蹲ったりで、もうまったく立錐の余地もなくなるほど。家の中に入りきれない人たちは、入口にしゃがみ込んで、一目でも客の姿を見、彼らの話を聞こうとしたのであった。年寄りはこの人たちが通り過ぎた村々に知り合いがいる。だから旅人たちの報告は非常に興味をもって聞かれたのだし、この興味はまた、若い世代にも伝染して、こうしてこの海岸線の前後何十マイルに及ぶ範囲に暮らす人々全体の家族関係やその歴史を知ったのである。

ケワタ鴨が語った最も悲しい話は、<sup>フイヨルド</sup>狭湾にカリブー狩りに出掛けた数人の人々についてのものだった。キャンプを移動する準備の整った秋のこと、何の前触れもなく突然、霜が降って海を氷で覆った。音もない静かな空から大雪が降った。

橇も犬も軟らかい雪の中にはまってほとんどが身動き取れない状態になった。やがて飢えが襲った。多くの人が死んだ。ある家は老婆が三人の息子と一人の娘と住んでいた。長男のポウラックは隣村に助けを求めようと決心した。彼は自分が出掛けたあとは、食料として役立つと思い、たった一匹だけ生き残った犬を母に預けた。それからこの軟らかい雪の中、危険を冒して徒歩で出掛けたのだ。

ポウラックが出てすぐ、母親はその犬がいなくなったのに気がついた。老婆は犬の足跡を見つけてたどって行くと、それは隣りに住む数戸の家の一つまで続き、それから先はどこにも出掛けた形跡はなかった。しばらく様子を窺っていたが、何の物音もしない。この家の人はみんな死んでしまったのだらうと思い、彼女は中に入るのを躊躇した。しかし犬はどうしても必要だ。母親は恐怖に打ち勝った。入口から大声で呼びかけたところ、家人は生きてはいるが、動くことが出来ない状態であることがわかった。「うちの犬は来ていませんか？」と尋ねたところ、家主は、いませんよ。見てもいません、という答えが返ってきた。しかし、老婆はそれでもなお、家探ししてベッドに被せたヒースを払いのけると、皮を剥がれた犬の死骸を見つけた。怒った彼女はこの肉を奪った。家人は飢餓のために衰弱し、どうしようもなく犬を殺したのだった。犬の肉を家に持ち帰った母親と子供たちは飢えを凌いだが、隣りの家の人たちは間もなく餓死してしまった。いつもなら、親切なポウラックの母もこうして極度の飢餓状態が続くと、自分の生存のことしか眼中になく、他人の苦しみにはもはや何の憐憫も感じるができなくなっていたのである。

隣村にたどり着いたポウラックは、前年の秋、この村人では二頭の鯨が獲れたことを知った。<sup>マディ・ウォーター</sup>彼は泥水村が餓死寸前であることを伝え、さらにこれまでも数人のものが他の村に援助を求



近寄って、眼にもとまらぬ一突きを心臓めがけて差し出した。しかし、彼の足元は不安定な氷の岩場だった。手負いの熊は、大きな岩棚を背にしている。その前肢の一撃で猟師を険しい氷山の斜面から叩き落とすだろう。その強力な腕の一振りで槍もヘシ折られてしまったほどだ。もしパカックが後ろに跳びすさらなかったら、熊の腕の中に抱きすくめられてしまったかもしれない。やむなく残った長い狩猟ナイフで熊を攻撃した。さらに近付いて機を窺うと、そのうち、犬を啗えて振り始めている熊が脇を向いた。パカックはその隙を逃さなかった。あらん限りの力を籠めて熊の横腹にナイフをめりこませたのだ。間一髪、身を引くのが遅れた彼の肩口を、熊は爪で深く切り裂いたが、それからどお〜と倒れ、もんどりうって流水の海に転げ落ちた。

自分の傷をさして気にする様子もなく、パカックは熊の皮を剥ぎ、肉を切り裂いて橇に載せた。切った犬の綱を結び合わせて家に帰ると、思わぬ収穫にみんなは大喜びだ。

それからパカックは熊の膀胱と胆嚢を穴あけ錐と一緒に槍の先に括りつけると、これを家の前の地面に垂直に立てた。三日間だけ、身体に留まっている熊の魂は、この儀式によって鎮められ癒されなければならないのである。

人に怪我や熊との格闘のことなど尋ねられ、「危ないところでしたね」と同情されると、彼はせせら笑った。獐猛な白熊退治も無害のアザラシを槍で突くのも、自分にとってはさして変わらないことだと豪語したのだ。傷の手当は彼の妻に任した。しかし、それは全治するのに数週間もかかったほどの重傷だった。

\*

\*

\*

ある日、無言はパカックの弟のイケラッピングとアザラシ猟に出掛けた。彼の方は幸運に与って多くの収穫物を授かったが、腕っ節が強く、優れた猟師であるはずのイケラッピングが一頭のアザラシも殺せなかった。手ぶらで帰宅するのを恥じたイケラッピングは困りはて、無言に分けてくれと頼んだのだ。断ると、イケラッピングは怒って喧嘩腰になってきた。気の弱い無言はやむなく折れて欲しいだけのアザラシを分けてやった。しかし無言の胸にはそのときの恨みが燻っていた。

イケラッピングが無言に対して親分風を吹かせたのは、そのときが初めてではなかった。彼はいつか喧嘩してイケラッピングに殺されるのではないかと恐れていた。他の人たちにも相談したが、みんながイケラッピングおよびパカック兄弟を怖れていたのだ。この乱暴なイケラッピングを始末する勇気がなかったのである。

さて、無言は何年も暮らしたこの村を出る気になった。まだ幼いころに母と一緒に出た、故郷のことを彼は日ごろ、よく話していた。そのころは広い世の中を見たくてこの海岸線にある、村から村へと渡り歩き、妻と二人、ここに身を落ち着けたのだった。懐かしい故郷の思い出はしかし、決して彼の胸から消えなかった。いつか帰郷して親戚や幼いころの風景をもう一度こ

の目で見たいと長いあいだ思い続けていた。イケラッピングとの諍いによって今年、ついに出ようという踏ん切りがついたのである。子供たちも生まれて大きくなった、この村に彼を繋ぎとめる絆もまた強かったのであるが。

たくさん犬を食わせるのは、なにしろ大量の肉が必要なので、無言にとって重荷ではあったのだが、彼はもうこのときまでに橇を曳ける、かなりの数の犬を子犬から育て上げていた。今や彼には十匹の優秀な橇犬がいた。橇の修理も完了していた。そこで、無言は雪解けで移動が困難になる前に出発することに決めた。彼の妻も一緒だ。彼女にとってまだ見たことのない外国同然の遠い国だった。この旅が終わるのに数年はかかるだろう。

冬季村の解散が始まった。無言の出発が契機となったのだ。何家族かが既に夏の狩猟の計画をしていた。まもなく、小川には水が流れ出すだろう。セイウチも岸辺近くに姿を見せ、鯨が広々とした海で潮を吹くのも間近だ。鮭もやがて川を上り始める。若い鷺鳥の大群が飛来し、カリブーも戻ってくる。楽しい季節がもうすぐそこまでやって来ているのだ。無言は夏の到来を祝ってかつて次のように歌ったことがあった。

アヤヤー、やっと夏がやって来た。なんてこの世は素晴らしい！

アヤヤー、やっとカリブーがやって来た。なんてこの世は素晴らしい！

アヤヤー、小川も大地を駆けめぐる。

アヤヤー、この喜びを話せないカモメはなんてかわいそう。

アヤヤー、この喜びを話せないカラスはなんてかわいそう。

アヤヤー、鳥を逃がしたってなんのその、この通り、魚なら選り取り見取りだ、

アヤヤー。

フランツ・ボアズ<sup>30)</sup>

---

30) Franz Boas(1858—1942). ドイツのミンデン生まれのユダヤ系アメリカ人。近代アメリカ人類学の父と言われ、ルース・ベネディクト (1887~1948) やマーガレット・ミード (1901~1978) ら多くの有能な文化人類学者を育てた。1883～84年、パツフィン島のエスキモーの調査を実施し、そこで人間の心理的・歴史的生活要因の重要性を知り、民族学研究の必要性を認識するに至る」(渡邊698)。主著は

*The Central Eskimo*, 6<sup>th</sup> annual Report of the Bureau of Ethnology, Washington D.C., 1888.

*The Mind of Primitive Man*, The Free Press, New York, 1911.など。また、イヌイト関する以下の論文がある。

“The Eskimo of Baffin Island and Hudson Bay” (*Bulletin*, Vol. XX, American Museum of Nature History, New York, 1901, 1907).

参考文献：

1. 和文のもの

岡 千曲「イグルー」『日本百科全書』秋庭隆編，小学館，1994，162-163

岡田宏明「エスキモー」『文化人類学事典』石川栄吉他編，弘文堂，昭和62年，102

渡邊欣雄「ボアズ」『文化人類学事典』石川栄吉他編，弘文堂，昭和62年，698

2. 欧文のもの

Birchfield, D.L. ed., *The Encyclopedia of North American Indians, Vol. 5.* Marshall Cavendish Corporation, 1997.

X | 参考文献

本参考文献は、エルシー・クルーズ・パーソンズ編著・神徳昭甫訳「北米インディアンの生活（1）—23部族の伝承と習慣—」『富山大学人文学部紀要』第26号（1997年3月）から始まり本シリーズを締めくくる「北米インディアンの生活（11）—23部族の伝承と習慣—」『富山大学人文学部紀要』第49号（2008年8月刊行予定）に及ぶ訳稿（1）～（11）の参考文献を一括掲載するものである。

（1）

1. 和文のもの

阿部珠里『アメリカ先住民の精神世界』日本放送協会，1995年

石川栄吉他編『文化人類学事典』弘文堂，1987年

ウイルソン，エドモンド『イロクォイ族の戦い』村山優子訳，思索社，1991年

エリアーデ，ミルチャ『シャーマニズム—古代的エクスタシーの技術—』堀一郎訳，冬樹社，昭和四十九年

大森元吉「ローウィ」『文化人類学事典』弘文堂，昭和六十二年，841

小稻義雄他編『新英和大辞典』研究社，1980年

祖父江孝男「アルゴンキン」『文化人類学事典』弘文堂，昭和六十二年，35

—————「クロウ」『文化人類学事典』弘文堂，昭和六十二年，237-238

—————「ダコタ」『文化人類学事典』弘文堂，昭和六十二年，452

—————「平原インディアン」『文化人類学事典』昭和六十二年，472

タイラー，エドワード『原始文化』比屋根安定訳，誠信書房，昭和三十七年

富田虎雄『アメリカ・インディアンの歴史』雄山閣，平成六年



トムソン, S. 編『アメリカ・インディアンの民話』皆河宗一訳, 岩崎美術社,  
モーガン, W.T.『アメリカ・インディアン史』西村頼男・野田研一・島田雅史訳, 北海道大  
学図書刊行会, 1989年

2. 英文のもの

Brandon, William, *Indian*, Houghton Mifflin Company, Boston, 1987

Wissler, Clark, *Indians of the United States*, Doubleday, Doran & Company, Inc. New  
York, 1940

(2)

1. 和文のもの

ウイルソン, ウイリアム『イロクォイ族の戦い』村山優子訳, 思索社, 1991年

エリアーデ, ミルチャ『シャーマニズム——古代的エクスタシーの技術』堀一郎訳, 冬樹社,  
昭和四十九年

佐々木宏幹「シャーマン」『文化人類学事典』石川栄吉他編, 弘文堂, 昭和六十二年, 344

祖父江孝男「イロクォイ」『文化人類学事典』石川栄吉他編, 弘文堂, 昭和六十二年, 70-71

———「メノミニ」『文化人類学事典』石川栄吉他編, 弘文堂, 昭和六十二年, 771

———「ラディン」『文化人類学事典』石川栄吉他編, 弘文堂, 昭和六十二年, 810

富田虎男『アメリカインディアンの歴史』雄山閣, 平成六年

中山和芳「イニシエーション」『文化人類学事典』石川栄吉他編, 弘文堂, 昭和六十二年,  
59-61

バーランド, C.『アメリカ・インディアン神話』松田幸雄訳, 青土社, 1990年

2. 英文のもの

Spence, Lewis, *The Myths of American Indians*, Dover Publications, Inc. New York, 1989.

(3)

阿部珠里『アメリカ先住民の精神世界』日本放送協会, 1995年

小山修三「パイユート」『文化人類学事典』石川栄吉他編, 弘文堂, 昭和六十二年, 582

祖父江孝男「アパッチ」『文化人類学事典』石川栄吉他編, 弘文堂, 昭和六十二年, 17

———「クリーク」『文化人類学事典』石川栄吉他編, 弘文堂, 昭和六十二年, 232

———「ナヴァホ」『文化人類学事典』石川栄吉他編, 弘文堂, 昭和六十二年, 546

———「ハヴァスパイ」『文化人類学事典』石川栄吉他編, 弘文堂, 昭和六十二年, 582

———「ピマ」『文化人類学事典』石川栄吉他編, 弘文堂, 昭和六十二年, 630

———「ワラパイ」『文化人類学事典』石川栄吉他編, 弘文堂, 昭和六十二年, 850

(4)

1. 和文のもの

- 阿部珠里『アメリカ先住民の精神世界』日本放送協会, 1995年  
板橋作美「ズニ族」『日本大百科事典』, 小学館, 1987年, 112  
牛島巖「外婚」『文化人類学事典』, 弘文堂, 昭和六十二年, 131-132  
木原研三他編「mesquite」『新グローバル英和辞典』三省堂, 1993年, 1099  
小山修三「モハヴェ」『文化人類学事典』, 弘文堂, 昭和六十二年, 778  
祖父江孝男「プエブロ・インディアン」『文化人類学事典』石川栄吉他, 弘文堂, 昭和六十二年,  
643  
——「ココパ」『文化人類学事典』, 弘文堂, 昭和六十二年, 728  
——「コマンチ」『文化人類学事典』, 弘文堂, 昭和六十二年, 285  
——「ホーピ」『文化人類学事典』, 弘文堂, 昭和六十二年, 708  
——「ユーマ」『文化人類学事典』, 弘文堂, 昭和六十二年, 797-798  
バーランド, C.『アメリカ・インディアン神話』松田幸雄訳, 青土社, 1990年  
フレーザー, ジェイムズ『図説金枝篇』内田昭一郎・吉岡晶子訳, 東京書籍, 1997年  
松田徳一郎他編「pleiades」『リーダーズ英和辞典』研究社, 1986年, 1678  
山路興造「なまはげ」『世界大百科事典』21, 平凡社, 1990年, 160

2. 英文のもの

Wissler, Clark. *Indians of the United States*, Doubleday & Company, Inc. New York, 1966, 222-223

(5)

- 稲村哲也「ウイチョール」『文化人類学事典』, 弘文堂, 昭和六十二年, 80  
加藤隆浩「コラ」『文化人類学事典』, 弘文堂, 昭和六十二年, 288  
桑名一博他編『西和中辞典』小学館, 1997年  
野田隆「メキシコ」『日本大百科全書』22, 小学館, 1995年, 729-738  
松田徳一郎『リーダーズ英和辞典』研究社, 1986年  
ミラー, マリノタルベ, カール編『マヤ・アステカ神話宗教事典』増田義郎+武井摩利訳,  
東洋書林, 2000年  
安田喜憲『蛇と十字架: 東西の風土と宗教』人文書院, 1995年  
吉野裕子『蛇——日本の蛇信仰』法政大学出版会, 1995年

(6)

1. 和文のもの

- 飯塚一郎「コルテス」『日本大百科全書』9, 小学館, 1995年, 631  
小池祐二「アステカ」『文化人類学事典』弘文堂, 昭和六十二年, 10-11  
——「トラスカラ」『文化人類学事典』弘文堂, 昭和六十二年, 535

グルジュンスキ, セルジュ 『アステカ王国—文明の死と再生』 落合一泰監修, 知の発見双書, 創元社, 1996年

吉村作治編 『Newton アーキオVol. 8 略奪された文明の一謎のマヤ・アステカの栄光と悲劇』 ニュートン・プレス, 1998年

2. 英文のもの

Bierhorst, John. *The Mythology of Mexico and Central America*, William Morrow and Company Inc. , New York, 1990, 147

Cline, Sarah L. “Native People of Central Mexico Independence” , *The Cambridge History of the Native Peoples of the Americas, Vol. II .Part 2*, edited by R. Adams & M. MacLeod, Cambridge University Press, 2000, 187.

Schryer, Frans J. “Native Peoples of Central Mexico since Independence” , *The Cambridge History of the Native Peoples of the Americas, Vol. II . Part 2*, edited by R. Adams & M. MacLeod, Cambridge University Press, 2000, 228.

Wickersham, John M. ed. *Myths and Legends of the World, Vol. 4*, Macmillan Reference USA/ An Imprint of The Gale Group, New York, 2000, 57-8

(7)

1. 和文のもの

大井邦彦「ティカル」『世界大百科事典19』平凡社, 1990年, 29.

桑名一博他『西和中辞典』小学館, 1997年

増田義郎「ティカル」『日本大百科全書16』小学館, 1995年, 32.

ミラー, メアリ/タウベ, カール『マヤ・アステカ神話宗教事典』増田義監修・武井摩利訳, 東洋書林, 2000年.

八杉佳穂『マヤ文字を解く』中央公論社刊, 1982年

———「マヤ暦に太陽暦はあるか—暦の謎をめぐる—」『国際交流99』独立行政法人国際交流基金, 2003年4月, 80-84.

2. 英文のもの

Miller, Mary/Taube, Karl. (ed.) *An Illustrated Dictionary of the Gods and Symbols of An Ancient Mexico and The Maya*, Thames and Hudson Ltd, London, 1993.

Wickersham, John M.(ed.) *Myths and Legends of the World, vol. 3*, Macmillan Reference USA/AN Imprint of The Gale Group, New York, 2000.

(8)

1. 和文のもの

大井邦明「チチェン・イツァ」『世界大百科事典』平凡社, 1988年

クレジオ, J・M・ル (原訳・序) / 望月芳郎 (訳) 『マヤ神話チラム・バラムの予言』 新潮社, 1991年

グロフ, スタニスラス著/川村邦光訳 『死者の書生死の手引』 イメージの博物誌32, 平凡社, 1995年

小池佑二 「トルテカ族」 『文化人類学事典』 石川栄吉他編集, 弘文堂, 昭和62年

ハリス, マーヴィン (著) 『ヒトはなぜヒトを食べたか』 鈴木洋一訳, ハヤカワ・ノンフィクション文庫, 1997年

ミラー, メアリ/タウベ, カール 『マヤ・アステカ神話宗教事典』 増田義郎監修・武井摩利訳, 東洋書林, 2000年

吉村作治 「ピラミッドの王国」 『略奪された文明謎のマヤ・アステカ・インカの栄光と悲劇』 Newtonアーキオ, ビジュアル考古学Vol. 8, Newton Press, 1999年

## 2. 英文のもの

Wickersham, John M.(ed.) . *Myths and Legends of the World*, Vol.3, Macmillan Reference USA/An Imprint of The Gale Group, New York, 2000

## (9)

### 1. 和文のもの

アッシャー, R. E. / モーズレイ, クリストファー編 『世界言語地図』 土田滋/福井勝義/福井正子訳, 東洋書林, 2000年

阿部珠理 『アメリカ先住民の精神世界』 NHKブックス, 1995年

『新英和大辞典第6版』 研究社, 2002年

### 2. 英文のもの

Sipley William F. "Native Language of California" , from *Handbook of North American Indians*, Vol.8., Edited Robert F. Heizer, Smithsonian Institution, Washington, 1978, 80-90

## (10)

### 1. 和文のもの

アッシャー, R. E. ・モーズレイ, C編 『世界民族言語地図』 土田滋他訳, 東洋書林, 2000年

大島稔 「ヌートカ」 『言語学大辞典 第三巻—世界言語編下1—』 亀井孝他編著, 三省堂, 1992年, 6-9

クラックホーン, C 『人間のための鏡』 光延明洋訳, サイマル出版会, 1971年

小山修三 「ユーロック」 『文化人類学事典』 石川栄吉他訳, 弘文堂, 昭和六十二年

祖父江孝男 「ヌートカ」 『文化人類学事典』 石川栄吉他編, 弘文堂, 昭和六十二年

古屋安雄 「長老派教会」 『アメリカを知る事典』 平凡社, 2003年

2. 英文のもの

Arima, Eugene・Dewhirst,John. “Nootkans of Vancouver Island” , *Handbook of North American Indians, vol.7, Northwest Coast*, ed. by Wayne Suttles, Smithsonian Institution, Washington, 1990, 391-411.

Pilling, Arnold R. “Yurok” , *Handbook of North American Indians, vol.8, California*, ed. by Robert F.Heizer, Smithsonian Institution, Washington, 1978, 137-154.

(11)

1. 和文のもの

アシャー, R.E./モーズレイ, クリストファー 「Map」 『世界民族言語地区』, 東洋書林, 2000年

アードス, R. +オルディス, A. 編 『アメリカ先住民の神話伝説』 上下, 松浦俊輔他訳, 青土社, 1977年

祖父江孝男<sup>1</sup> 「クラー」 『文化人類学事典』 石川栄吉他編, 弘文堂, 昭和六十二年, 472

—————<sup>2</sup> 「チプウィヤン」 『文化人類学事典』 石川栄吉他編, 弘文堂, 昭和六十二年, 231-232

岡 千曲 「イグルー」 『日本百科全書』 秋庭隆編, 小学館, 1994, 162-163

岡田宏明 「エスキモー」 『文化人類学事典』 石川栄吉他編, 弘文堂, 昭和六十二年, 102

渡邊欣雄 「ボアズ」 『文化人類学事典』 石川栄吉他編, 弘文堂, 昭和62年, 698

2. 英文のもの

Birchfield, D.L. ed., *The Encyclopedia of North American Indians, Vol. 5*. Marshall Cavendish Corporation, 1997.

Erdoes, Richard/Ortiz, Alfonso ed. *American Indian, Myths and Legends*, Pantheon Fairy Tale & Folktale Library, Pantheon Books, New York, 1984